

---

# 『京都学園大学 司書課程年報 2001』

平成14年（2002）年3月発行（通巻2号）

---

## 〈目 次〉

□本の住処(すみか)、本の力……………	1
視覚障害者にとっての「共有資源としての情報」	
—図書館情報を中心に—……………杉田正幸	2
統計情報論	
—レファレンスの現場から—……………荒井洋二	8
◇和古書刊記にみられる“出版”をあらわす語……………古川千佳	12
◆訪書日録(1)……………	21
◇専門資料論	
—講義心得帖—……………久保和雄	22
◆図書館訪問の記	
—豊岡市立図書館—……………下山志保子	28
◆中国東三省訪書の旅……………岡村敬二	30
◆訪書日録(2)……………	49
<hr/>	
■担当教員〈この1年〉……………	50
■紙芝居のある風景	
—エディテック報告……………松原拓也	54
執筆者紹介／後記	

表紙：「木版師 活版師」『風俗画報』明治35年3月  
裏表紙：「新聞雑誌の愛読者」『滑稽新聞』明治40年7月  
(ともに部分)

## 本の住処（すみか）、本の力

図書館の書庫に立ち入って、そこに収蔵され幾年かを過ごした本たちに囲まれたりすると、ときにその本のざわめきが聞こえたりすることがある。そのざわめきやらつぶやきやらが、快活なものであるにせよ、はたまた怨嗟の聲であるにせよ、そのような本を所蔵している書庫を持つ図書館というのはなんとも惹かれるものだ。

いろいろな出自を持って出版され、以来何十年かの時代を書庫で過ごしてきた本には、まだ大きな力を宿すもの、命弊えて見えるものなどさまざまである。それは、書物が持っている力、「本体力」とでもいうべきものだ。つまり、命永らえ、今の時代になお生き残っているか、命尽きて死蔵と化しているか、それはその本の持っている力、書物自身の力に関わる事柄なのである。それゆえそれは図書館の預かり知らぬところである。

だがここで、忘れられてはならないのは、本が図書館に在るという事実、これは少なくとも、それらの本たちは、なべて等しく、スタートラインには立たせてやるということだ。それは、本だけでなく紀要や雑誌などの雑誌記事・論文についても同じこと、つまり、スタートラインに立たせたあとに、読み継がれ時代に生き残るか衰退するか、それはその本や論文の力によるもの、中味に関わることからである。

遠回りな表現となったが、わたしはいま、書誌作成のことに言及している。幸い現今では、これまでのような一元的で権力的ともみえる書誌構築といったことからまぬがれており、各機関が分担で書誌をとることにより全体を構成していくといった、sharedで、組み上げの形式に変わってきている。書誌作成者の意欲と努力によって、まずスタートラインに立たせることが可能となってきた、つまり作成者の努力と意欲が報われる形となっているのだ。

さて、そのことを前提にし、いま一步踏み込んで書庫の本たちのことを考えてみる。そこには標準的で既成的な書誌事項という衣装を身にまとして等しくスタートラインに立ち、走り始めた本の姿が見て取れる。しかしながらそれらの本たちは、時に、もう一つの顔を持っていたり、その本に固有の別の物語が纏わり付いていたりとすることがあるのだ。それは既成の「書誌事項」には決して現れ出ないものなのである。

そしてその固有で個別的・個体的な、本に纏わり付いている事柄、それは本の来歴といってよいと思うのだが、そうした物語は、その本とともに存在し生きてきたその図書館の人たちによってこそ付加され語られてしかるべきことである。昨年はそんなことをずっと考えていた。

（岡村敬二 本学教授）

# 視覚障害者にとっての「共有資源としての情報」

= 図書館情報を中心に =



大阪府立中央図書館 杉田正幸

はじめに

視覚障害者にとって、「共有資源としての情報」の事例としては、1988年にはじまったパソコン通信点訳ネットワーク「てんやく広場」(現「ないーぶネット」)がまずあげられよう。

視覚障害者をめぐる情報化は、点訳や音声化のためのテキスト情報の共有化、点字プリンターによる打ち出し、重複作業をさけるための各種情報の共有化など、その利用の方法については、ある意味では、図書館資料・情報の共有化という状況を、10年くらいは先取りしてきた。

しかし、共有資源としての情報をめざしながら重複作業を各図書館で行っているという現状もある。ここではその現状と課題について考察する。

点字情報のネットワーク

点字図書や録音図書など視覚障害者に対する情報を作成するには、1冊の墨字本の場合早くても3ヶ月、長いものでは1年以上が必要である。このような資料を有効に提供するにはネットワークによ

る情報の共有化が重要である。

点字図書は、以前は点字板や点字タイプライターを用いて作成していた。しかし、1980年代の後半にパソコン点訳ソフトが普及し、点訳作業がパソコンに移行した。パソコン点訳のメリットは、点字プリンターなどを使えば複製が容易であること、また、フロッピーなどの電子媒体として保存が可能であり、保存スペースも少なくすむこと、さらにネットワークで情報を共有化することにより、重複製作を防ぐことができること、などである。

現在、点字情報のネットワークとしては、「ないーぶネット」「盲学校点字情報ネットワークシステム」「点字情報ネットワーク事業」の3つがある。

「ないーぶネット」「盲学校点字情報ネットワークシステム」は、目録情報などの二次情報とともに点字データそのもの(一次情報)もネットワーク化するシステムである。また、「点字情報ネットワーク事業」は新聞記事に関して、点字データをネットワーク化するものである。

(1) ないーぶネット

1988年にパソコン通信点訳ネットワー

クとしてスタートした「てんやく広場」(現「ないーぶネット」)も1998年からは全国視覚障害者情報提供施設協議会(全視情協)の運営に入り、現在では、40,000件の電子化された点訳データの蓄積と国立国会図書館作成の「点字図書・録音図書全国総合目録(AB01)」の提供が行われている。全国の点字図書館90館、全国のボランティア団体、視覚障害学生がいる大学、公共図書館などが加入している。

公共図書館では、都立中央・都立多摩・岐阜・大阪などの各都県立図書館、全国25市立図書館がこのネットワークを利用しており、自館の障害者サービスに活用している。このネットワークの特徴は、

全国の点字図書館や公共図書館が製作した28万件の点字図書や録音図書の目録情報を検索できること

自館では作成困難な点訳図書を各地の点字図書館や公共図書館が製作し、ネットワーク上で共有し、ダウンロードして利用できること

オンライン上の目録で点字図書や録音図書の所在を調査した上で、オンラインで所蔵館に貸出依頼ができること

点字図書や録音図書の新着情報や利用の多い図書のランキングの紹介

視覚障害者自ら点字図書データをダウンロードしたり、相互貸借の依頼がオンライン上でできること

などが大きな特徴であり、今後多くの公共図書館が参加することによりさらにデジタル化された点字データの普及が進むと期待される。2001年には、現在のパソコン通信方式のサービスからインターネット方式のサービスに転換され、今後の

視覚障害者サービスには必須のネットワークであるといえよう。

## (2) 盲学校点字情報ネットワークシステム

「盲学校点字情報ネットワークシステム」は国立特殊教育総合研究所に設置するホストコンピュータを介して、盲学校における点字教材や点字図書のデータを、インターネットにより全国の盲学校相互間で利用できるようにするものである。1993年に心身障害児教育財団が文部省の委託を受けて、運用を開始した。このシステムは、各盲学校に設置されるネットワーク端末装置(通信用端末機、点字プリンタおよび入力専用端末機)と、センター機能を果たすホストコンピュータとを結び、教材等の点字化の迅速化、利用の効率化を図る。利用可能な情報量を飛躍的に増大させ、盲学校における教育活動の一層の充実を図っている。また、「ないーぶネット」に蓄積されている点字データも利用可能となっている。

## (3) 点字情報ネットワーク事業「点字」Bニュース

「点字情報ネットワーク事業」は視覚障害者に新聞などの情報を点字化し、タイムリーに提供することを目的として、社会福祉法人日本盲人会連合を中央実施機関(ホスト)として、都道府県に地方実施機関(地方端末)を置いて実施されるものである。この事業は、「障害者の明るい暮らし」促進事業メニューの一つとして、厚生省(現「厚生労働省」)が社会福祉法人日本盲人会連合に委託し1994年に開始された。

中央実施機関は月曜日から金曜日まで毎日、日本経済新聞の朝刊の記事と日盲

連で取材した福祉関係情報を抽出、10ページ分を点字化し全国の地方実施機関に提供する。地方実施機関では、そのデータをダウンロードし、点字プリントで印刷したものを地域の視覚障害者に配布している。2001年4月からは音声版「電話ナビゲーションシステム」として電話で点字JBニュースの内容を聞くことができるようになった。

## ・録音・音声情報のネットワーク

### (1) DAISY (デイジー)

従来のカセットテープの録音図書は原本1冊をカセットにした場合、5巻から10巻になると言われる。これは検索性もなく、カセットテープも劣化しやすく、視覚障害者にとっては利用が不便であった。そこで国際的にも録音図書のデジタル化を行い、検索性の高い録音図書の開発が必要となったのである。

1997年のIFLAコペンハーゲン大会で、DAISYがデジタル録音資料製作システムの国際標準として決定された。1998年10月からはデジタル読書機「プレクストーク」が正式に発売され、各点字図書館・ボランティア団体がDAISYによる録音図書の製作を本格的に開始した。DAISY形式の録音図書の特徴は、検索機能・ジャンプ機能・見出しごとの拾い読み機能が充実していることである。1枚のCDに最大53時間の録音が可能で、これまでのカセットテープによる録音図書製作に変わるシステムとして注目される。現在、全国の点字図書館を中心におよそ1万タイトルのDAISY図書が製作されている。公共図書館でも数館ではDAISY図書製作を開始しているが、今後、パソコンを利用したデジタル録音図

書製作の普及が最大の課題であるといえよう。

また、DAISY図書をインターネットなどでダウンロードして利用できるようなシステムも開発中で、今後、録音図書の配信をインターネットで実現して行くことも課題である。

#### DAISY製作ソフト

・ Sigtuna DAR 2.0.17J

シグツナ ディーエーアールは音声のみの録音図書を作成するためのオーサリングソフトウェア。DAISYコンソーシアムが提案しているDAISY 2.0の仕様に基づくDAISY録音図書の作成をサポート。障害者の情報アクセスを支援する目的で、かつ非営利活動で用いるために開発し、サポートの責任を負わないことを条件に無償で配布。

・ LpStudio Plus 2.7.7 (株式会社エルザ)

テキスト、及び、イメージを同期させたマルチメディアコンテンツを作成するためのオーサリングソフトウェア。DAISYコンソーシアムが提案しているDAISY 2.0の仕様に基づくDAISYマルチメディア図書の作成をサポート。  
¥190,000

・ MyStudio PC

視覚障害者にも操作可能なように音声ガイドの付いたDAISY作成ソフト。DAISYコンソーシアムが提案しているDAISY 2.0の仕様に基づくDAISY録音図書の作成をサポート。現在、開発中で、近日中にベータ版が公開予定。

#### DAISY再生ソフト

・ LpPlayer (日本障害者リハビリテーション協会)

<http://www.normanet.ne.jp/daisy/lpplayer/lpplayer.htm>

- ・Seed (今村竹志)  
<http://saga.cool.ne.jp/daisyj>
- ・Playback2000 (英語版)  
<http://www.tpb.se/english/daisy/orderp2k.htm>
- DAISY再生用機器
- ・プレクストーク (プレクスター)  
<http://www.plextor.co.jp/products/plextalk01.html>
- ・ピクタリーダー (メルコム)  
<http://www3.ocn.ne.jp/%7Emelcom/vreader.htm>

## (2) インターネットのコンテンツ

音声情報としてインターネットコンテンツも図書館として重要である。視覚障害者はホームページの内容を音声で読み上げる「音声ブラウザ」を用いれば、リアルタイムにホームページの内容を確認できる。図書館では電子図書館として各種の電子データを視覚障害者に提供して行くことが必要である。その中で図書情報として視覚障害者に有用なものを紹介する。

本の内容のテキストデータ

- ・「青空文庫」

<http://www.aozora.gr.jp/>

青空文庫は、無料公開のインターネット電子図書館。著作権の切れた作品と、「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキスト、HTML、エキスパンドブックの三つの形式で提供している。

- ・パピレス

<http://www.papy.co.jp/>

パピレスはパソコンや携帯端末に電子本をダウンロードして読む日本最大の総合電子書店。現在、90社以上の出版社の

電子書籍を約6500冊掲載。本は、テキスト形式、エキスパンドブック、PDF、Acrobat eBook形式、HTML形式がある。

本の内容の音声朗読・読み上げ

- ・早耳ネット「無料朗読サービス」  
<http://hayamimi.net/hayamimi/roudoku/>

- ・音声図書館

<http://www.onseitosyokan.gr.jp/>

- ・活字情報を声で楽しむサイト、声の花束 (略称こえたば)

<http://www.koetaba.net/>

上記3つのサイトは、インターネット上で、新聞や雑誌、本の内容を朗読し、読み上げてくれる。「音声図書館」は機械音で読み上げるがその他は、肉声での読み上げである。このようにインターネット上で、朗読サービスをしているホームページは増えており、視覚障害者の情報入手に役立っている。

- ・点字図書・録音図書のレファレンスツール

- (1) ないーぶネット

<http://www.naiiv.gr.jp/>

- (2) 盲学校点字情報ネットワーク

<http://www.tenji.ne.jp/>

- (3) 国立国会図書館「NDL CD-ROM Line点字図書・録音図書全国総合目録」

全国の点字図書館と公共図書館などが製作した点字図書・録音図書・DAISY図書のCD-ROM版目録。年2回発行。初年度は、検索ソフトの利用料¥20,000、データ使用料¥40,000、2年度目からは、データ使用料¥40,000。

- (4) 日本点字図書館ホームページ「点字図書・録音図書全国総合目録」

<http://www.nittento.or.jp/>



日本点字図書館の蔵書検索と国立国会図書館の「点字図書・録音図書全国総合目録」の検索が可能。

(5) 国立国会図書館「全国の点字図書・録音図書製作速報」

[http://www.ndl.go.jp/service/sikaku\\_service.html](http://www.ndl.go.jp/service/sikaku_service.html)

「点字図書・録音図書全国総合目録データベース」編集集中の速報データで月毎に追加、半年毎にCD-ROMに収録。

(6) 「デージー録音図書目録」(日本障害者リハビリテーション協会)

<http://www.dinf.ne.jp/doc/daisy/>

DAISY形式の図書2,580タイトルの冊子体目録。墨字版(全2巻)とDAISY版(1枚)がある。平成11年度に行われた厚生省委託DAISY録音図書変換事業による。全国の都道府県、市区町村立図書館、点字図書館、大学図書館などに目録がある。

(7) 点字雑誌・録音雑誌一覧

[http://www.naiiv.gr.jp/naiiv\\_users\\_htm\\_file/index.htm](http://www.naiiv.gr.jp/naiiv_users_htm_file/index.htm)

全国の点字図書館や公共図書館、ボランティア団体の製作した点字雑誌145タイトル、録音雑誌461タイトルの詳細情報。

(8) 近畿視覚障害者情報サービス研究協議会(近畿視情協)ホームページ

<http://www.ichigo.sakura.ne.jp/kinnki/menu/>

近畿地区の点字図書館、公共図書館53館が加盟。各図書館の点字図書・録音図書着手、完成情報を掲載。

・点字図書・録音図書のネットワークの問題点

視覚障害者資料は、点字図書や録音図

書を製作する出版施設がないため、点字図書館や公共図書館がその任務に当たっているのが現状である。点字図書館や公共図書館に所属するボランティアが製作したり、各地のボランティア団体が点字図書や録音図書の製作に当たる。これらの情報は一元化されておらず、分散しているのが現状である。

「ないーぶネット」などいくつかの大きなネットワークがあるものの、加入している図書館はほとんどの点字図書館と公共図書館やボランティア団体の一部のため点字図書・録音図書の製作を一元的に管理することができていない。また、着手情報もほとんど登録しないため、結果的には複数の図書館で同じ図書を作成してしまう問題がある。ないーぶネットでは特に点字図書などは3箇所以上で同じ図書を製作しないという取り決めがあるものの、それが守られていないのが現実である。

一例として、井上美由紀『生きてます、15歳。500gで生まれた全盲の女の子』の製作状況を上げてみると、点字図書、録音図書、DAISY図書は以下のようなものである。

点字図書完成(5)：埼玉県立熊谷点字図書館、埼玉県立浦和図書館、山梨ライトハウス盲人福祉センター、西宮市視覚障害者図書館、熊本県点字図書館、

点字図書着手(6)：高知県点字図書館、延岡ライトハウス点字図書館、広島ブレイルセンター

録音図書完成(21)：函館視力障害者福祉協議会函館点字図書館、青森県視覚障害者情報センター、秋田県点字図書館、岩手県立点字図書館、埼玉県立熊谷点字図書館、川口市立前川図書館、日本点字図

書館、立川市立中央図書館、一步の会、神奈川県ライトセンター、新潟県点字図書館、滋賀県立視覚障害者センター、箕面市立中央図書館、神戸市立点字図書館、岡山県視聴覚障害者福祉センター、鳥取県ライトハウス点字図書館、山口県盲人福祉協会 点字図書館、徳島県立盲人福祉センター点字図書館、福岡市立点字図書館、久留米市民図書館、鹿児島県視覚障害者情報センター

録音図書着手<sup>(2)</sup>：相模原市立保健と福祉のライブラリー、横須賀市点字図書館

DAISY図書完成<sup>(11)</sup>：青森県視覚障害者情報センター、秋田県点字図書館、岩手県立点字図書館、日本点字図書館、新潟県点字図書館、長野県上田点字図書館、名古屋ライトハウス名古屋盲人情報文化センター、岡山県視聴覚障害者福祉センター、徳島県立盲人福祉センター点字図書館、福岡市立点字図書館、鹿児島県視覚障害者情報センター

以上のように、点字図書が8館、録音図書が23館、DAISY図書が11館（2002年1月現在）作られている。これらの情報を収集するのに「ないぶネット」の検索だけでは、半分弱のデータを取りこぼすことが分かった。つまりこの検索以外に国会図書館の製作速報や各ボランティア団体のホームページなどの情報、各公共図書館の点字図書や録音図書の製作状況をホームページなどで調査をおこなうことで、これだけの結果を見出すことができたのだ。また、ホームページを持たない公共図書館やボランティア団体もあるので、これ以上に重複製作が行われていることになる。

録音図書については、点字図書館などでは複製して貸出する。従って、利用者

を待たせることがほとんどない。ベストセラー図書であれ、数館が作成することで、タイムリーに貸出可能である。なのに、23館もが同じ図書を製作すること自体が問題と言わざるを得ない。日本では年間でも数千タイトルの録音図書しか作成できないのに、20館以上もが重複製作をしている現状では、これでは視覚障害者の情報保障を阻害していると言わざるを得ない。今後、情報の一元的な管理、貸出システムの構築、利用の強化がさらに望まれると言えよう。

さらに、公共図書館やボランティア団体は、著作権法上、録音図書を製作する場合、著作権者の許可を求める必要がある。上記の図書の場合、4つの公共図書館、一つのボランティア団体は、当然、著作権処理をすることとなる。こんなことをしていたら著作権者からも嫌がられるのは当然である。視覚障害者のための録音図書の著作権許諾処理の一元化をすることで公共図書館での録音図書重複製作の回避も望まれるところである。

## ・まとめ

視覚障害者の情報環境はインターネットなどネットワークの活用で大きく変化した。障害者サービスもこのネットワークを活用し、少しずつ情報の一元化が進もうとしている。これらの情報を障害者が等しく利用できるよう、各情報提供施設が行い、地域差のないサービスが行われることを望みたい。

（すぎた・まさゆき）





# 統計情報論

= レファレンスの現場から =



大阪府立中央図書館 荒井 洋二

一昨年教室で、公共図書館に寄せられる質問事例を紹介しました。学生のみなさんがどんな印象をもたれたかわかりませんが、いろいろなジャンルの質問があること、それも定型になりにくい雑多な質問が多いことなどを、幾らかなりと伝えられたかと思えます。今回は、そのつづきのつもりで、統計情報についての質問に公共図書館の現場でどう対応しているのか、教室でおはなしするように紙上で語ってみたいと思います。実際的な能力向上の方法にも触れたいとおもいます。

## インターネット時代の統計情報

インターネット情報が拡充したので、統計関連の情報を容易に入手できる環境が整備されつつあります。たとえば1996年5月に開設された総務庁統計局のホームページをご覧になったらわかりますが、実にたくさんの統計情報が公開されています。またリンク情報の内容も拡充がすすんでいるので、もう印刷物はいらぬのではないかという印象を持つ人がいるかもしれません。しかし、米国センサス局が提供する情報内容と比較すると

かなりの格差があります。それでもいったん公開された情報が、さらなる情報要求を生んで、徐々に情報公開が進んでいくことでしょう。しかし、インターネットはタダではないので料金面での制約があります。それから、詳細情報が有料の場合があります。統計利用者の側にも課題があります。膨大な統計情報はファイル形式になっていることがあります。ダウンロードするにも最小限のスキルが必要です。たとえば、HTMLファイルをエクセルで変換利用するには、エクセル側の変換機能を利用する必要があります。もうひとつ、もともと統計データはそれを読む能力が必要ですが、デジタル情報が容易に手にはいるようになればなるほど、データを評価する利用者の能力が問われます。こうしたインターネット状況については、みなさんの方がよく知っているかもしれませんので、一瞥するだけにしておきます。

## 公共図書館の現場では

公共図書館の現場では、まだまだ紙情報が主役です。統計情報についてきかれたとき、カウンタではどう対応している

か、実際のところをご紹介します。利用者が求めている情報がなにかが把握できたら、(実は、本当に求めていることがなんなのか判らないことも多いのですが)参考図書の本棚を案内します。だいたい書架に同行します。当館では参考図書の書架を二大別しています。壁面の書架に事典・便覧類を、その前の低書架に統計・白書・名簿類を分けて置いてあります。それぞれNDC順に並んでいますので、書架自体がレファレンス機能を持っていることとなります。さっと必要な資料に行き当たることもありますが、だいたいはそれではすみません。そこで総合統計書、たとえば『日本統計年鑑』にあたってみます。索引を引いて該当ページを開きます。そこに求める統計があればそれでよし、もっと詳細な統計が必要なら、そのページの欄外に原統計(一次統計)の名称がでてきますので、あらためてその一次統計にあたります。これがひととおりの調べ方の実際です。利用者のなかには、統計類の書架を案内するだけで、ご自分でさがされる方もありますが、おおかたは司書が代行することになります。『日本国勢図会』や『民力』をまず見ることもあります。聞きなれない統計の場合は、『日本統計索引』や『統計情報索引』など索引を手がかりに資料名をつきとめて所蔵を調べることもあります。当館にはある程度一次資料もそろっていますので手も足も出ないような質問は少ないですが、市町村図書館では、総合統計書をフル活用しても不十分かもしれません。その点でインターネット情報は市町村図書館にとって福音かも知れません。もうひとつ触れておきたいことがあります。ビジネスマンはマーケティ

ング情報をもとめていることが多いのですが、マーケティング資料は高価で公共図書館では手が出ません。『ビジネス調査資料総覧』(旧書名は『総合マーケティング資料年報』)に載っている資料のほとんどは所蔵していません。それにマーケティング情報はインターネット上でも無料でないことが多いようです。いましばらくは公共図書館では、さきにふれた『民力』をフルに活用するしかありません。

### 利用者ニーズの不易と流行

情報が氾濫している社会のイメージが浸透しているからでしょうか、利用者は簡単にあらゆる情報が手に入るという思い入れをもって図書館を訪れます。司書が手間取っているのをみて、いらだつ利用者もいます。コンピュータになじまない人々にも情報化された社会のイメージは浸透しています。印刷情報は数値がまとまるまでにはある期間が必要です。ですから一年とか、3ヶ月のタイムラグがあるのが普通です。利用者はそんなことにおかまいなしに、つい先日の先月末の数字などを求めてきます。もちろん株価情報や為替情報などは新聞に昨日の数字も出ていますが、それらはむしろ例外です。もうひとつ、これも情報化社会のイメージ効果といえるかもしれませんが、いやに細かい数値を欲しがります。一般的に言って、統計数値の桁が多ければ上位3桁ぐらいが有意な数字でそれ以上は必要ない、というのが専門家の常識だといいます。統計の基本認識がない人ほど細かい数字にこだわるようです。仕事で統計にふれているビジネスマンでも知っていることを安易に一般化し

て、畑違いのことにはびっくりするような誤解をしていることがあります。これは統計情報に限ったことではありませんが、資料はそれぞれの分野によってちがう読解力を要求します。以前から、統計は一般の利用者にとってとっつきにくい分野でしたが、情報としては爆発的に増えているので、それに振り回されているようにもみえます。

### 情報仲介者としての司書の能力

膨大な統計情報と、基本認識を前提に出来ない利用者のあいだに立って、司書が役立つためにはどんな能力が必要とされているのでしょうか。ひとつは、統計情報全般について広く知っていることです。これはむずかしそうですが、統計の出所というか、作成者（機関）にはどんなところがあるかを知ることである程度パースペクティブをえられます。法律で統計をつくることが決まっている指定統計などは官庁が統計を作成しています。企業や法人が行政機関に報告するために作成している統計もあります。業界が独自に作成しているものもあります。

もうひとつは、統計利用の実際についていづらく知っていることです。統計情報を何に使うのか、利用者にあまり突っ込んで聞けないあいでも、利用者とのやりとりからだいたい使用目的を推測できるからです。レファレンス・サービスの経験からだんだん判って来ますが、それには限界があります。一般社会のさまざまな活動について知ることでは補えられないのですが、これも道の遠いなしになります。それよりも統計学の基礎を幾分なりとも身につけることです。統計数値の意味を読み取るにはど

うしても基礎的知識が必要です。これは統計学の入門書を読めばよいのですが、言うほど簡単ではありません。データ分析、確率、統計的推定それぞれ数学が要りますので敷居がたかいのです。また、統計と確率は全然発想がちがいますので、その意味でも入口がみつけにくいのです。理論がわからなくても、統計利用の方法がいづらくわかればよいのではないのでしょうか。

### スキルアップの方法

私自身は『民力』を事あるごとに引いて、時には資料解説を読んで徐々に統計全体に及ぶように工夫してきました。『民力』は少しマーケティングを意識していますので、公共図書館の利用者の要望に近いと思ったからです。いまからカウンタで統計情報に関する質問に接する新人には『日本国勢図会』をすすめています。少し考えると『統計情報索引』を引けばすぐに資料名がわかりそうにおもえますが、ある程度、個々の統計書になじまないと『索引』もすばやく引けないものなのです。そこで質問をうけるたびに『日本国勢図会』の索引から本文に引かれている統計書にみちびかれて一次統計にいたるという迂回路をとおります。また、事後に該当する本文を読んで基本になる知識をすこしずつ得ていきます。こうして統計書を個々に知るとともに、統計情報を見つける動が働いてくるようになります。ただし、この段階ではあまり欲張って他の項目も読んでしまわないようにします。切実感が薄れるからです。利用者の質問によりそった知識を得るように、実際の質問に答えるのにどれほどの知識が要ったのかという問題意識をも

って『日本国勢図会』の該当箇所をそのつど読んで行きます。

さて、そうして半年なり一年なり経験をつんできまると、統計情報全体についての見取り図を得たいと思うようになります。そこでわたしがすすめたいのは、『日本国勢図会』をもう一度、隅々まで読んでしまうことです。『日本国勢図会』には<しおり>がはさまっています。そのしおりには、「知っていると便利な人口・国土面積など27項目の数値」や「1987年（明治3年）からの西暦・年号対照表」が書いてあります。見返しには口絵折込で「全国の市」・「世界の独立国」の地図が載せてあります。つぎに、表題紙、まえがき、目次、例言、各国通貨の名称と為替相場（年末現在、年平均）、前年の十大ニュースとページがつづきます。そうしてようやく、「第1章 世界の国々」が始まります。各章は概説と統計図表とコラムで構成されています。これが「第52章 国防と自衛隊」までつづきます。そのあと、索引があり、主要参考資料として統計書がリストアップされています。さらに付録として、主要長期統計、府県別主要統計、府県別生産統計が付いています。奥付と表紙を含めるとこれで『日本国勢図会』のすべてに触れたこととなります。こんなふうに一冊のコアになる参考書を手の内にいれるといういろんな効用があります。利用者からは、ほんとに種々雑多なことを聞かれます。探索のアイデアがなにも浮かばないこともよくあります。そんなとき、とりあえず『日本国勢図会』を引いてみます。そうしているうちに探索の方向がみえてくることがあります。藁をもつかむ、と言いますが、一本の藁を統計分野につくるわ

けです。使い慣れたコア参考書を自分なりに作っておくことは、他の分野に応用できる方法です。『日本国勢図会』を読みこむのは、統計図表（グラフ）に慣れる意味もあります。統計情報はひとつひとつの数値そのものより、その経年変化など変化をみるグラフに真骨頂があります。統計書には数表しか載っていないくても、それを有効に利用するためにはグラフ化する必要があります。

みなさんには少しまだるっこしい方法に見えるかもしれませんが。統計学とその利用について基本的な知識を学校で学ばれた方には unnecessary 訓練かもしれませんが。ここでは個々の学問分野については習熟していない一般の司書にとって実際的な勉強方法をおはなしました。わたしは戯れによく司書のことを、キックボクサーにたとえます。キックボクサーのパンチはなんだかなまくらパンチにみえます。ボクサーのパンチ力には到底およびないようにみえます。しかし両者が闘うのをテレビで見たことがあります。キックボクサーにはまさにキックという武器があります。キック技の牽制によってボクサーのパンチは簡単に届きません。司書の能力もなまくらパンチですが、ときに専門家の役にも立てることがあります。それよりも一般の利用者に役立つには、なまくらパンチを鍛えるより、キック力を鍛える方が大切におもえます。普通に考えられている基礎的知識のその下のゼロからの基礎を得る方法をいつも考えたいとおもっています。

（あらい・ようじ）

# 和古書刊記にみられる“出版”をあらわす語



京都大学附属図書館 古川千佳

## はじめに

およそ593,000点、これは日本国内で出版され現在購入できる図書点数である（『日本書籍総目録』2001年版による）。年々増える図書出版件数ではあるが現代の和図書の標題紙や奥付など目録情報における情報源とされる場所にみられる“出版”をあらわす語はどのくらいあるだろうか。いまわたくしの手の届く範囲の現代図書を見ると「年月日発行」すこし古いもので「蔵版・板」といった表現がとられているものがほとんどである。

目録作成する図書館員にとっては用語が単純で定型化している方が判断は楽ではあるが、古典籍の書誌情報源を眺めると現代図書のように一様ではない。京都大学附属図書館の和漢古典籍を数年にわたり、書誌調査していく途中で書き留めたメモのなかから刊記に用いられた“出版”をあらわす語について紹介してみたいと思う。これらは貴重書選定されていないおもに1600年代半ば以降の図書からの抽出なので、一般的な近世刊本のサンプルといえるかと考える。

折しも国立情報学研究所（NII）古籍の取扱いに関する小委員会でNACSIS-

CAT への古籍登録におけるマニュアルが整備されようとしている時期であり、マニュアルを適用する前段階で必要な書誌分析（目録作成における最大のポイントはじつはここにあり、正しい分析が行われないかぎりいくら目録規則やコーディングマニュアルがあっても正確な目録を作成することはできない）の一助となれば幸いである。

## “刊記”について

ここにいう“刊記”とは巻末に限らず、出版事項を記した部分を指す広義での刊記である。つまり“刊記”とは場所を指す語ではなく、出版事項を記した機能的部分を指す。よって多くの場合は巻末に存在するが、ときには表紙の原題籤、前後の見返し、扉、扉裏、あるいは柱（版心）に存在する場合もある。

基本的には日本出版の刊本に用いられた語のなかからおもなものを抽出したものであるが、参考として一部中国出版図書に使われている語も含めている。

## 調査の範囲

この拙文の基礎となる書誌調査とは京



都大学附属図書館に蔵される幕末の儒者河野鐵兜（1825-1867）旧蔵書の全調査を目的として筆者が夜間および土日の開館時間を利用して1999年より継続しているものであり、鐵兜の子息天瑞による寄贈を示す寄贈印を頼りに行っているものである。鐵兜旧蔵書だけでなく書庫の端からすべての古典籍を順に開いてゆき、図書分類（京都大学附属図書館の独自分類）10部門中、現在およそ9部門をすませた段階にある。あと1部門を残しているのですべてに目をとおしてはいない。よって京都大学附属図書館の蔵書（普通書古典籍）の9割方を母体としたサンプルと考えていただきたい。

### 出版をあらわす語

現代図書の目録情報源上では“出版”をあらわす語のほとんどが「発行」という語に集約されてしまっているのであるが、この語は近世においてもかなりよく使われている。そのもとの意味は“世に弘める、賣出す”ことであり、そこから出版をさすようになった語である。つまり「発行」は現代と同様の“出版”をあらわす語として使用されている場合もあるが、製作・販売のみを担当するときに使用されている場合も多い。

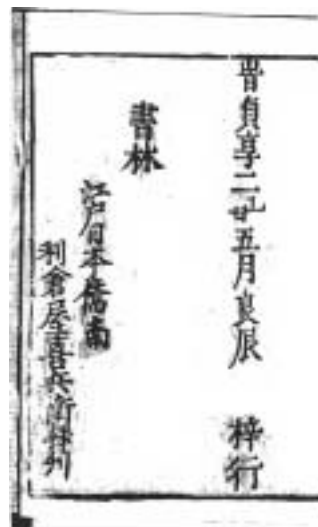
以下に和古書刊記に用いられた“出版”をあらわす語を紹介してみたい。

#### 1. 版材に由来する語

版木の材としては中国で古来“梓”が使われたところから実際の版材を離れても「上梓」、「梓行」あるいは単に「梓」といった語が多く使われることとなった。日本では版木の材としては“山桜”がもっとも多く使われ、“梓”が使われ

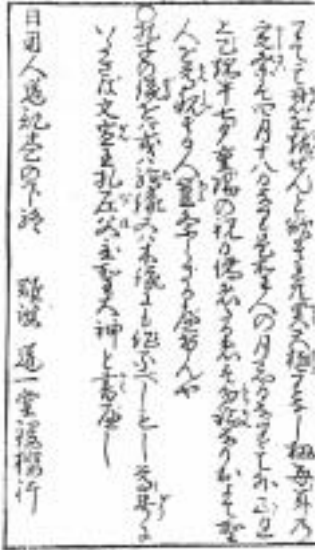
たとはあまり聞かないが、「上梓」という言葉などは電子出版の時代に変わっても出版を意味する語として現代に生きて使われている。“梓”にはそのほか「梓板」、「發梓」、「刊梓」、「壽梓」、「繡梓」、「綉梓」、「藏梓」といった使用例がみられる。

反対に実際に使用された材に由来すると推測される語もある。“梓”ではなく“桜”や“棗”等、実際に使われたであろうところの材名を用いて洒落てみたものとおもわれる。“桜”は数例にのぼるが、“棗”はいまのところ1例をみるだけである。使用例としては“桜”では「壽櫻」がもっとも多く、「藏櫻」、「櫻行」あるいは単に版元（出版者）名＋「櫻」があり、“棗”では「鑄棗」がみられる。中国出版書に「錫板」というのがあったがこれも材に由来するもののひとつであろう。



増補師語録「梓行」





日用道人記「櫻行」



書de雋「鐫栗」

われている。「開版」、「開板」、「開判（版に通ず）」、「板行」、「版行」、「出板」のような熟語として、また活字版には「活版」、「活板」なども使用される。活字版にも「活板」と使用されるように“板”が必ずしも製版に限られるわけではない。



日本霊異記「版」

### 3. 文字を刻むことに由来する語

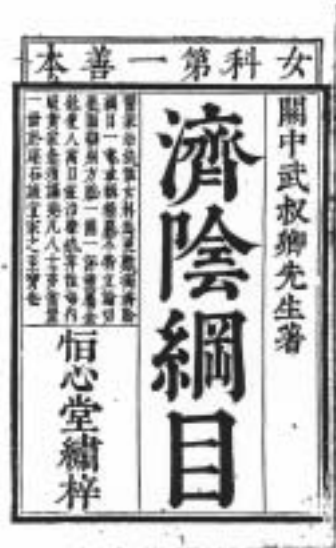
板を彫って文字をきざむ、あるいは活字を彫るなどの意で“刻”、“刊”、“契”、“彫”、“雕”、“鐫”、“a”、“鏤”、“b”などが、また文字をぬいとしてするすという意であろう“綉”、“繡”が使われている。使用例としては「刻」、「敬刻」、「藏刻」、「刻行」、「刊行」、「刊」、「契（刊に通ず）行」、「開彫」、「肇彫」、「彫刻」、「雕刻」、「鐫」、「開鐫」、「新鐫」、「藏鐫」、「a版」、「開a」、「鏤」、「鏤梓」、「b梓」、「綉梓」、「繡梓」などがあげられる。

### 2. 板（製版）、活字に由来する語

製版、活字版ともに「板」、「版」が使



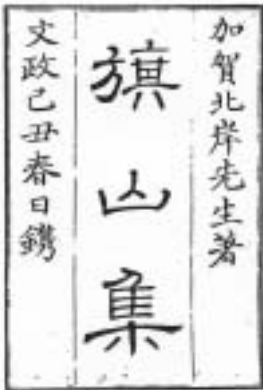
紫式部家集「刻行」



濟陰綱目「繡梓」

#### 4. 刷ることに由来する語

“摺”、“印”等を含んだ語で「刊摺」、「摺刊」、「印行」などの使用例があげられる。印刷の意に由来する語であるが、印刷のみを担当する場合と出版行為全体を担当する場合があり、他の語と併せてその役割を考える必要がある。



旗山集「h」



佛說阿彌陀經義疏聞持記「印行」

5. 版・板を蔵することに由来する語

“出版”に関してはだれが出資するのか、だれが版を製作するのか、だれが印刷をするのか、だれが販売する（あるいは販売しない）のか、等いろいろな行為があり、出資者が著者側にあるのか、本屋側にあるのかによってその表現もおのずと変わってくることになる。書肆名が表示されていてもそれが必ず“出版者”（版元、蔵版者）を指すとは限らない。個人版あるいは寺院版、塾版などは製作のみを本屋に依頼する（ときには販売も依頼したであろう）が、出資者として出版の責は著者側が自ら負うというものが多い。

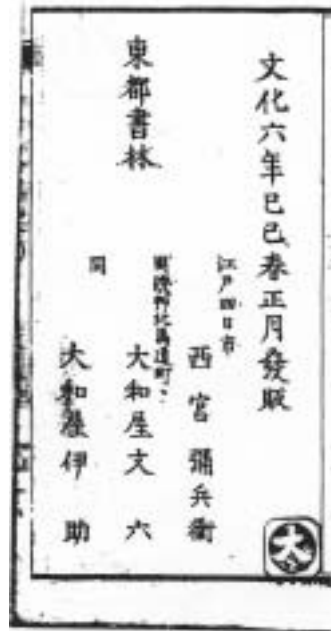
出資が著者側にあっても本屋側にあっても、版・板の持ち主（出資者）を表すのが「蔵版」、「蔵板」、「貯板」などである。



藤河百首鈔「蔵板」

であることをあらわす語としてあげられよう。「発行」もここに由来する。

ちなみに現代の中国出版書では「出版」「発行」と併記されることにより担当内容が区別されていることが多い。



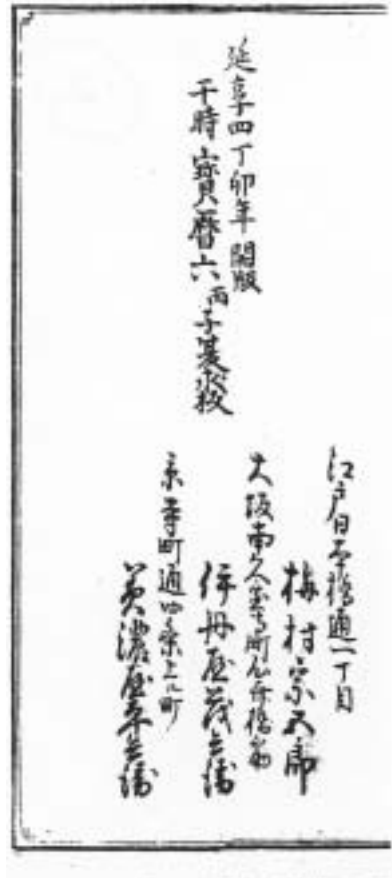
田村物語「發販」

6. 販売、発売することに由来する語

“出版”がどのような目的でおこなわれるのか一目でわかる表示もある。「開版賣場」、「發弘」、「發市」、「發販」、「發客」、「發沽」、「發版」、「發兌」などはあきらかに販売を意図して刊行されたもの



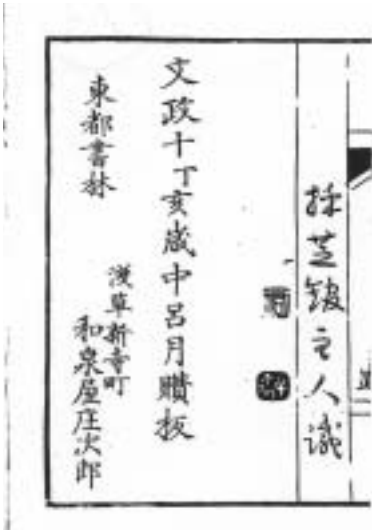
櫻川話帳綴「發沽」



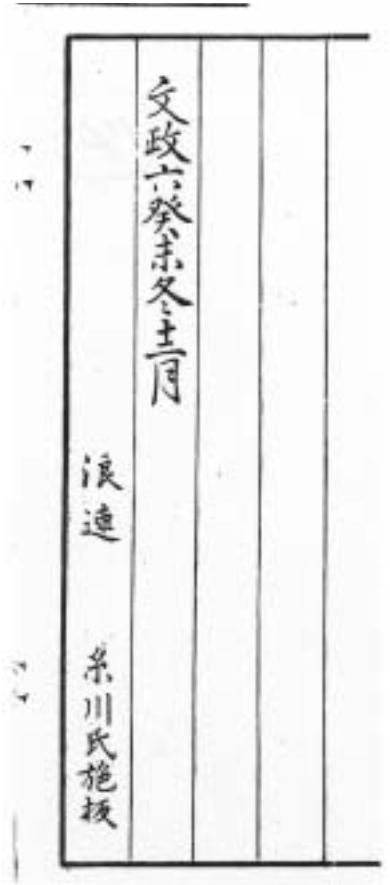
伊勢ものかたり「求板」

## 7. 版・板の移動に由来する語

製版本が出版される場合、永久に最初の出版者のもとに版木が蔵されるとはかぎらない。版木そのものが転売されることもあったが、焼失あるいは摩滅してしまったものの出版権のみが売買され、得られた権利によってあらたに開版されることもあった。それら移動をあらわす語が「求版」<sup>1)</sup>、「求蔵」<sup>2)</sup>、「買板」<sup>3)</sup>、「購板」<sup>4)</sup>などである。活字においても売買の事実があったと推測されるが、それを示したものには筆者は遭遇していない。



左傳凡例考「購板」



蕃蕃考「施板」

## 8. 施本を目的とした語

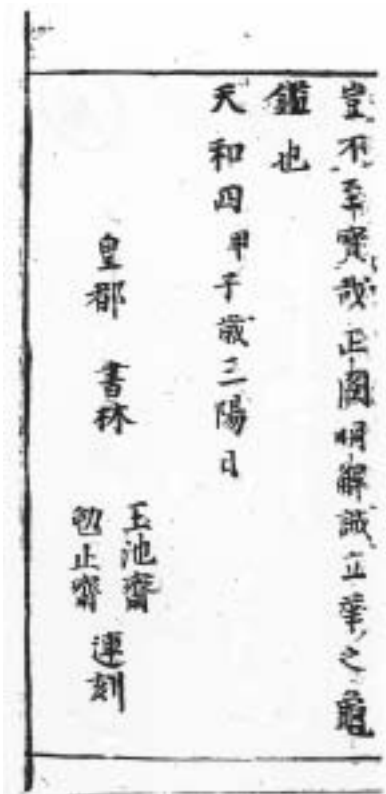
個人や寺社などが出資して配り本とする目的で出版されることをあらわす語に「施版」、「施板」、「施印」などがあげられる。施主は個人の場合もあれば、複数の人名が連記されていることもある。

9. 複数の出版者をあらす語

営利、非営利出版を問わず複数の出版者あるいは製作・販売者がある場合には単にその名を列する場合と「合刻」、「合版」、「合板」、「合彫」、「合梓」、「連刻」、「雙梓」、「同刻」、「全刻」などの語を添える場合がある。

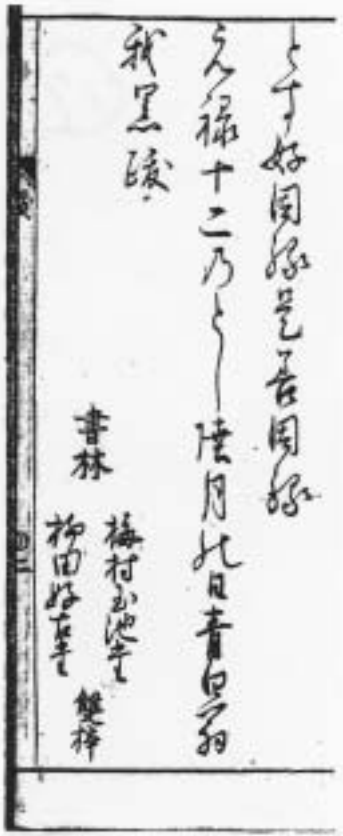


金剛f 釋文「合彫」



立華正道集「連刻」





牡丹道しるべ「雙梓」

おわりに

以上若干の分類を加えながら“出版”をあらゆる語をみてきたが、じつに多くの表現がなされてきたことがわかる。実際には上記の語がいくつか組み合わせられたり、出版年月日や出版者名の末尾等二カ所以上に異なる語が使用されたりしている場合も少なくない。さらに見返しと巻末、扉と巻末、見返しと柱などに複数の刊記があって、異なる表現がとられている場合にいたってはどの刊記を最終的な出版の刊記として採用すべきかを見極める必要もある。

今回は多くの書誌的事項のなかから“出版”をあらゆる語についてのみ紹介したが、正しく十分な書誌分析の上にした目録作成につながれば幸いである。

(ふるかわ ちか)

\* 刊記部分の影印図版はすべて京都大学  
附属図書館所蔵資料

[参考文献]

『日本古典書誌学辞典』

(井上宗雄ほか編, 岩波書店, 1999)

『書誌学談義江戸の板本』

(中野三敏著, 岩波書店, 1995)



## 訪 書 日 録

某月某日 防衛庁防衛研究所史料室

これまでわたしは、「満洲国」出版事業や図書館活動について、原資料はもっぱら外務省外交史料館の起案文書などに拠ってきた。しかしながら、該館の「対支文化事業」など文化事業部起案文書は、諸事業の興亜院への管轄移管（昭和13年）対滿事務局・興亜院・外務省東亜局あわせ設置なった大東亜省への統合（昭和16年）などにより、昭和15年ころ以降の文書はほぼ所蔵がなくなっている。それは陸軍特務部などの関連資料ともども戦後焼却の憂き目にあったというところかもしれない。それでもなにか原文書が少しでも残っていないかと、以前から気になっていた防衛庁防衛研究所史料室に今回出かけてみた。

本史料室の資料については、冊子体目録未刊行なので、直接カードから資料にあたる以外にない。史料室所蔵の資料は、敗戦時焼却を免れて米軍に接收され外交交渉の末返還なったもの、厚生省復員局が収集整理したもの、関係者から収集するのが中心である。公立図書館でもよく利用されなにかと話題となる『戦史叢書』もこの編纂である。

とりあえずカードで、陸軍 満州 事変、満洲 全般から資料を探して出納してもらおう。文庫としてまとまったものから、舞鶴復員部調製『中共地区残留者留用機関企業体一覧表』を見つけ、戦後中国で図書館・文化機関の資料整理のため留用された人々たちも、と喜んだのであったが、残念ながらわたしの期待した人々の名前はなかった。また他に、絵を描く

のに達者な現地部隊員の挿絵入りガリ版刷り冊子やら兵士の手記や書翰も残されていて、わたしの領域とは関連は薄いのだが、こうした原資料を前にするといつもながら身のひきしまる思いがする。今回は、綴じ込み資料の『滿蒙に関する各種証説の解剖』などいくつかの複写を依頼した。

翌日、都立中央図書館の文庫室にて実藤文庫資料を拝見。拝見といっても今はマイクロフィルムでの閲覧であり、少し見ると頭がいたくなって閉口する。戦前期満洲国立奉天図書館長で満日文化協会評議員も務めた参議府議長袁金鎧の日本滞在時、各地各所を詠んだ『東渡百一詩』がありそのなかに、京都での保津川くだりの詩があったのでこれを複写した。このマイクロからの複写は、1階の業者委託で、これら図書館複写事情は、わたしもよく内情も推し量れるのだが、やはり手間と時間がかかり、せめて複写は文庫室で、清算は業者、というわけにはまいらないものかと、つい利用者の側の感想を持ってしまった。

（岡村）



『東渡百一詩』（東京都立中央図書館実藤文庫）

## 専門資料論 = 講義心得帖 =

久保和雄

専門資料を大まかに認識し、把握することはできても、専門資料とは何かを明確に、厳密に定義づけることは難儀（困難）である。

専門資料の定義の一例として、「専門資料論・中森強編著・東京書籍」を見ると、「専門資料とは、一般的に特定分野のみ対象とした資料であり、特定領域の専門家向けに刊行された資料をいう」としている。

特定分野は、限定的分野と考えることもできるが、百科事典以外、オールラウンドの資料を想定することは困難である。またその百科事典でも収集項目は、限定（特定）的であると言わざるを得ない。

有史以来人類が生み出した資料は、数限りない。そして、その数限りない資料についてつぶさに考えれば、すべての資料（図書と限定してもよい）は、その分野（対象）を特定し、限定していると考えられる。つまりすべての資料（図書）は、何らかの意味で特定のであり限定的である。そのように考えればすべての資料は、専門資料（図書）ということになってしまう。すべての職（業）は、それぞれに専門職であるという論法である。

専門資料とは、それぞれの時代において、特定の学問（知識）領域の最先端に位置する資料と言えるかも知れない。

有史以来人類の文化（人間が後天的に学習によって習得した一切のものの総称）学問（知識）技術は、分化に次ぐ分化を繰り返して今日に至っている。そ

して、それが資料（図書）に反映されてきた。一般的には、今日の時点で人類の文化、学問（知識）技術は最高度に達したと言える。しかしテーゼあればアンティテーゼありで、宇宙規模で考えれば私たち人類の知識、技術等は微々たるものであるとも言える。

人間は月に立つことは可能となったが、現在のところ台風の進路を変えることは出来ないし、地震の予知も出来ないでいる。つまり人類の文化（学問、技術）は、今後も人類が減びるまでアンバランスに発達するだろうと予測できる。私は、人類が減びるのは何らかの形（意味合い）でバランス（大自然との調和）を失ったときではないかと考えている。

また、人類の滅亡は、人間の内部崩壊（核戦争等）によって生じるかもしれない。

余談であるが、古生物学者（複数）の測定によると、生物種の寿命は、それほど長いものではないようである。特に魚類、哺乳類等は短命の種ということである。従って哺乳類の一種である人類の寿命は、私たちの予想以上に早く尽きるかも知れない。そのことに思いを馳せると私たちは、今日現在地球上に生きている奇跡ともいえる人間としての生命を絶対に粗末には出来ないと、私はそのように思うのである。

NDCに即せば、科学、数学、代数学、抽象代数学のように枝分かれし、また科学、医学、臨床医学、X線、アイソトープのように分化してきている。

専門資料を利用するであろうと予測できる専門家(医者、医学者)側も、内科、外科、心臓外科、脳神経外科、耳鼻科等とその専門分野が、別々になってきた。

然るに、専門資料とは、当該学問(知識)の最先端へ利用者を導く目的を明確にしている資料ということができる。利用者は、専門資料を利用して、なおかつそれを乗り越える目的があるかもしれない。

小説、随筆などが専門資料とは言えないことは、これで説明が可能である。

源氏物語も徒然草も、また現代小説も、それ自体で完結していてそれ以上の分化はしない(内容)の資料ということができる。

それに比べ専門資料は、必ず次の分化を孕んでいる資料ということができる。

私が「専門資料論」を担当しているのは、京都学園大学であるが、別の大学の学生が、ある時私に次のような質問を投げかけて来た。

「詳細な『魚類図鑑』や『昆虫図鑑』は、なぜ「専門資料ではないのですか」と、私は次のように説明した。なお詳しくは『専門資料論』担当の先生に尋ねるように補足しておいた。

「(詳細)な『魚類図鑑』や『昆虫図鑑』は、貴君がいうように確かに『魚』、『昆虫』と特定しているが、このような資料(図鑑類)は、幼児から専門家(専門領域として研究している学者)までが利用する資料と言える。従ってこのような資料は、参考資料(参考図書)であって、専門資料とは言えない」

「特定の学問領域の最先端に位置する資料を専門資料」と仮定すれば、この領域の参考図書(図鑑、辞書、事典、蓄積された統計書等)が世に出て来るのは、

つまり刊行されるのは、相当の時間を経た後であるのが普通である。

然るに、所謂「参考図書」は、専門資料にはなり得ないと考えるのが常識的である。

この辺りは、図書館員としては、ごく常識的に考えて差し支えないと思う。

また、別の日「専門資料と呼べる雑誌を一つ教えて欲しい」との質問があった。

私が透かさず回答したのは、NATUREである。この雑誌に論文が載ると「ノーベル賞」級と言われている。つまりNATUREには「ノーベル賞」を予感させるような論文が、掲載されるようであると説明すると学生は納得した。

図書館は、不特定多数の人々の一人一人が、迷うことなく自分の必要とする資料(情報)に近づけるように資料が組織されていなければならない。

それは、児童対象の資料、一般資料、専門資料、その他すべての資料について言えることである。

司書(図書館)は、利用者とその利用者が目的とする資料の間の障害物を取り除き、出来る限り短時間に、利用者が初期の目的(求める資料に接近できること)を果たせるように心掛けるべきであろう。

この理念は、ランガナタンの「Save the time of readers(利用者の時間を図書館の都合で空費してはならない)」の考え方と一致する。

資料を組織(分類、目録、各種の書誌類の整備、つまり資料への案内)し、人的態勢を整えて、公平、迅速、的確に利用者が目的とする資料(情報)に接近できるようにサービスするのが図書館の理念である。

専門資料の特性を把握する必要性もこ

の一点が入り口でありまた出口である。

「専門資料論」の著作や雑誌（論文）等を二、三編いて見ると、解説にあたって三部門（人文科学、社会科学、自然科学）つまり三分野に区分している。

これは、適当な処置であろう。

しかし国語辞典（広辞苑、角川必携国語辞典、その他）や百科事典に当たってみると、人文科学と社会科学は広義にも狭義にも互いに交差して、明確な区分けは、ほとんど不可能に近い。

また自然科学にしても、広義（古典的）には、人文、社会科学と区分出来るが、最近の傾向としては、生命科学、人類学（文化人類学）、人間工学等の領域が錯綜して、学問（専門領域）の境界が見えにくくなってきている。学際（的）という言葉が、このあたりの事情を示していると言える。

このことはまた、学問（専門）領域の分化と統合が繰り返されることを示唆し、専門資料への接近が非常に難しくなってきた事情も物語っている。

NDCに即して見ると、1類、2類、3類、7類、8類、9類が人文科学、4類、5類が自然科学（技術）、3類、6類（仮に社会科学系として置く）が社会科学と割り付けることが出来る。

しかしこのような割り付けでは矛盾が多すぎて、論理（辻褄）の收拾がつかなくなる。

英語学のある教授が「英語の（規範）文法」は、一週間で教えられる（学べる）が、例外は、一生を費やしても教えられない（学べない）と言っていた。

また、かつて大数学者（多変数複素関数論）岡潔（1901 - 1978）が、随筆に「数学は、感情が理解しなければ理解したことにはならない」と、アメリカの数

学者の例を上げて書いていた。

ことほどさように、学生に「専門資料論」の原則をテキスト通りに講義することは、それほど負担にならない。

しかし限られた時間内に例外、矛盾を説明し、学生の感情にまで理解させようと思うと、先人の膨大な知識の集約を学生に理解できる言葉（出来る限り美しい日本語）に翻訳して講義しなければならない。

これには、正に「魔法の杖」が必要になるが、「魔法の杖」を振るためには、莫大なエネルギーが必要である。浅学非才の私には「魔法の杖」は扱えない。

それでも私は、「魔法の杖」を探している。「魔法の杖」は簡単には見つからない。

知識（学問）体系の分類が、NDCの分類体系と純粋に対応（一致）しないのは周知のことであるが、この事実からNDCを否定することはできない。

NDCは、知識体系を、無理を承知でNDCの分類体系に当てはめるようにしているから前後の関係から見ると、あくまでもNDCが前（先）という立場である。

知識（特に自然科学・技術）の発展、変化は日進月歩である。その発展、変化にNDCの分類（体系）を当てはめていくとすると、極端に言えば、毎日分類表を変えなければ間に合わなくなる。資料の累積が命である図書館において毎日分類表を訂正（追加）していたら特に書架分類において收拾がつかなくなる。

分類（体系）は、出来る限り長期にわたって、固定的、安定的でなければならないのである。

分類表（体系）は、過去および現在の資料の在り処（ありか）を位置付け将来



の資料を予測して一定の受け入れ態勢が整っていれば、それで特段の問題はない。大雑把に言えば分類表の問題はこれで解除される。

利用者が、目的の資料に接近できるように案内するのは書誌・目録の分野（役割）ということになる。

ただし、利用者が目的とする資料の関連資料が、全然別の場所に分類されてしまうような分類表は望ましいものではない。

分類表においては、同質の資料（関連資料）を近づけ、異質の資料を遠ざける仕組みになっていることは大事である。

ここで『書誌』という言葉について触れておきたい。

書誌は、書誌学とも絡んで、曖昧に使われているように思われる。私としては、目的の資料（情報）に接近するための有りとあらゆる目録類を図書館においては『書誌』と呼ぶと限定しておきたい。つまり書誌と目録は、同義と考えても何ら支障はない。

私は、学生の成績評価は試験ではなくレポートによって行っている。

もともと私は、択一式の試験は好きでないし、それに文は人なりで、レポートを見るとそれぞれの学生の科目への取り組み姿勢の一端が見える。従ってレポートは、丁寧に点検すれば成績評価の材料として最適とは言えなくても十分である。

レポートを課すと、どこの大学でも一人二人の学生が「レポートはどのように書けばいいですか」と質問してくる。「論文とレポートは違いますか」と尋ねる学生もいる。

それで私は、レポートの書き方、論文とレポートの違いについても知恵を絞る

ことになる。

レポート（report）は、報告、報告書。国語辞典によっては「小論文」と当てている場合もある。

論文（thesis）も、国語辞典では「あるテーマについての意見や研究の結果などを、すじみちを立てて書いた文章」としか説明していない。

これでは、レポートと論文の区別はつかない。

世の中には、皆が分かっているようで、事改めて問われると、実は曖昧模糊で分かっていない言葉がある。

今日の流行語「IT革命」もそうかも知れない。

「IT革命」を「Revolution of Information Technology」と対置できる学生は少数である。

レポートは報告（書）。学生の側から言えば「私は、この科目『題目』についてこのように理解しました」という旨の報告（書）で事足りる訳である。

対して、論文と対応する英語の「thesis」は、学位論文、卒業論文と訳されているように、今日までの通説、定説を覆すまでには至らなくても、通説、定説に自分独自の見解を加えることが求められる。

つまり「通説、定説」プラス「アルファ」が、論文（thesis）に要求されるぎりぎりの条件ではないかと考えられる。

このようなことを説明すると、件の学生は「レポートの意味がわかりました」と丁寧に会釈してくれる。私も悦に入る。

人文科学の資料は、スコープ（間口）が広く、シークエンス（歴史の連続性、奥行き）が深い、従って目的とする人文科学の専門資料に接近するための（専門的）目録類も多岐多端である。

スコープが広いということは、人文科



学の分野が広い範囲に亘っているということに他ならない。またシーケンス（歴史の連続）が深いということは、人文科学の資料は、その資料としての利用価値が長期に亘って維持されることを意味する。

従って人文科学の資料（専門資料）は、その累積が重視される。

然るに、膨大な人文科学資料（専門資料）の中から目的とする特定の資料を目指して探索の旅に出かける訳であるが、その前に「目的とする特定の資料」に関する目録、抄録、解題等（書誌類）に当たることになる。

この資料探索のたびに出るにあたっては、基本的な参考図書、出来る限り多くの書誌類を使いこなすことが必要になる。

しかし、だからと言って参考図書、目録類の羅列をするだけでは学生は関心を示さない。また参考図書、目録（書誌）類を羅列的に暗記しても実際にはあまり役に立たない。必要なことは、参考図書、目録（書誌）類を縦横に使いこなす能力を涵養することである。

そこで私は、資料検索のための基礎の基礎として、国語辞典（広辞苑）、百貨辞典、読史総覧（日本史総覧、読史備要）を三種の神器として使いこなすことを奨めている。

その上で、学生の一人一人が興味（関心）のある領域（分野）の資料の目録、抄録等に実際に当たってみるように示唆すると、学生は大学の図書館でそのことを実践して報告してくれる。

社会科学の場合、一部人文科学（古典的社会学）一部自然科学（現代社会学）と交差する領域もあるが、資料検索にあたっては、人文科学と、ほぼ同様と考え

ても差し支えない。

自然科学（技術）の場合は、目的とする原資料に近づくための目録、抄録（書誌）類がどうしても後手後手になる。これは日進月歩する自然科学（技術）系の原資料の性質上抗し難いことである。

従って、自然科学（技術）領域の最新の情報（資料）要求には、いわゆる「電子メディア」が、その優位性を発揮する。

ただし、（自然）科学（技術）史（蘭学、和算、中国算法等）は、人文科学と交差する面がある。

一般資料（非専門資料）の場合も同様であるが、目的の専門資料（情報）に接近するためには、当該資料（情報）に関する目録、抄録、索引類を利用する訳であるが、的確に目録、抄録、索引類を活用するためには、当該資料の主題、その資料の主題を代表する言葉（キーワード）を発見（把握）することが大事である。

キーワードが適切に主題を表現している場合もあるが、キーワードが主題に埋没していて発見（把握）できない場合もある。

図書館（員）は、各種資料の主題を代表する言葉（キーワード）を縦横に駆使して、目録、抄録、索引から目的の資料（情報）に接近する方法を理解しておくことが望まれる。

主題を代表する言葉（キーワード）を発見（把握）するにあたっては、図書館（員）の語彙能力の優劣が問われることになる。

故に私は、学生に国語辞典（例としては広辞苑）、百科事典（例としては世界大百科事典）を徹底的に活用（引き熟す）することを奨めている。

それぞれの分野の専門家ではない図書館（員）が、求められるそれぞれの分野

(主題)に精通しているということは先ずあり得ない。

しかし主題を表現する語彙については、努力次第では、目録、抄録、索引、その他の書誌類(目的とする資料に関するあらゆる記録)の活用によって精通(経験の積み重ねを要する)することは決して不可能なことではない。

情報(資料)サービス機関(図書館)の職員(司書)には、語彙の豊かさ、豊富さが望まれる。

語彙の豊かさは、単に語彙を暗記していることではない。言葉から言葉への連想、言葉に対する豊かな感性が情報サービスにおいては、その成否を左右すると私は考えている。

私は点呼をとることはほとんどしない。しかし学生の一人一人を覚えることも大事なので、雑誌「サライ」のクロスワード・パズルを学生に解かせるようにしている。そしてこの時に学生の名前を呼んで一語ずつ答えさす。

サライのパズルは、かなり難解であるが、広辞苑を使いこなせば案外簡単に解ける。

作者は広辞苑から言葉を選んでいうようである。

ある学生が、パズルを解くとき「自分が言葉を知らないことを痛感する」とレポートの最後に書いていた。

確かに学生の語彙が非常に少ないことが、このパズルの回答に至る過程でよくわかる。

最近若い人たちの「ぼかし言葉」が問題になっているが、心理的、社会的面からの考察は別として、私はこれは言葉の貧弱さに起因していると考えている。

人から人へ伝わる言葉の感性、そのすばらしさを無意識に感知していれば「ぼ

かし言葉」には絶対に満足できないはずである。自分自身の心の壁を相手に伝える言葉の感性を若い人たちは喪失しているように思える。

授業(講義)にあたって常々私が念願するのは、学生が将来、人生の折々(節目節目)で、私の講義の断片を思い出し、何かの参考にしてくれることである。つまり学生の心に響く授業(講義)をしたいと望んでいる。

近年学生の学力の低下のことが喧伝されているが、これには教える側の怠慢の問題もあると私は考える。

学力(知)の問題はしばらく置くとして、学生の一人一人には必ず心の何処かに『琴線』がある。その琴線に触れる授業(講義)が出来るかどうか、これが教える側の力量ではないかと私は考える。確固たる自信があるわけではないが、私は学生の『知』に訴えるよりは『情』に届く授業(講義)をしようと心掛けている。

必要に迫られると『知』は、何時でも何処でも何からでも取り入れることが出来る。しかし『情』は、特定の人間関係(伝えるものと伝えられる者、教える者と教えられる者)においてしか育たない。つまり『情』は、人から人へしか伝わらないのである。

そして、『知』は『情』を育てないが、『情』は『知』を育てるのである。

知的好奇心の源は、情にある。これが私の信念である。

「数学でも感情が理解しなければ理解したことにはならない」と岡潔は言うが、知を情に訴えるということは、けだし難問である。

(くぼ・かずお 本学非常勤講師)

# 図書館訪問の記 豊岡市立図書館

下山 志保子

このところ、地方の都市や町で楽しい図書館がつけられているが、情報が入ると私もできるだけ訪問することにしている。昨年のお話だが、豊岡市立図書館が新しい場所に移ったと聞いたので、お礼かたがた行ってみることにした。

お礼というのは、もう8年も前のことである。当時の宮垣弘一館長が私を講師で招いて下さった時、わざわざ宿を用意し、豊岡から出石、城崎と一日中案内して下さいだったのである。「こんな遠方までなかなか来て下さる先生はないので」と、しきりに恐縮されるので、私のほうこそ恐縮してしまった。11月という秋も深まる季節、円山川の川辺は真っ白な薄の穂が風に揺れて、ため息が出るほど美しく、とびっきりの景色だった。絶滅寸前になっているというコウノトリの飼育場へも案内して下さい。

豊岡市立図書館は、当時は市民会館の一部を間借り状態で、館長と嘱託とアルバイトという人員構成であった。それでも、図書館に対する情熱はひとかたならぬものを持っておられ、嘱託やアルバイトといった人たちも、館長と共に図書館への思いは同じように深いものだった。その図書館の担当者を支えていたのが地域文庫活動をしているお母さんたちだった。小さな図書館だったが、児童サービスや館内の整備は、行き届いていた。私が泊まるということを知って、多くのお母さんたちは講義が終わってから、子どもの本や図書館について話をして遅くまで残って下さった。図書館と子どもた



「知の蔵」

ちへの思いを聞いた。

そんなことを懐かしく思い出しながら、新しい図書館に電話をすると、女性の館長が出てこられた。どこかで聞き覚えのある声と思いながら「長崎青海ですが」（これは私の以前のペンネーム）というと、「ああ、長崎先生、橋本です。お久しぶりですね」と言われる。あの時の嘱託だった橋本さんが館長になっておられたのである。橋本さんは講座の後、館長と一緒に私を案内して下さいた人である。

思い出話や、図書館の移設のことなど長話の後、それなら、なおのこと出掛けなくてはと、行かせていただく約束をした。

しばらくして、お電話があり、急に橋本さんに用事ができたとのこと。ストーリーテリングや児童書についての勉強のため、担当者からの希望で太子町立図書館へ行くことになったそうである。研修会は、その内容や講師、訪問先など、担当者の希望などによって行うという。図

書館内での会議にも、正職員アルバイトを問わず全員参加で意見交換をするのであった。アルバイトは会議にも研修にも参加できないことが多いなかで、うれしいことである。担当者間のコミュニケーションもスムーズである。

他の方が案内してくださるということで、予定通り伺うことにした。奇しくも8年前と同じ11月の穏やかな日に、図書館を訪ねた。出迎えてくださったのは、なんと、あの時、アルバイトをしておられた村尾さんだった。後で聞いた話であるが、村尾さんは私のためにわざわざ休暇をとって下さっていたのである。お手数をかけてしまった。

新しい豊岡市立図書館は瓦屋根で、城下町豊岡にぴったりの建物であった。「蔵」をイメージしたという図書館には「知の蔵」と掲げてあった。昔の豊岡陣家跡にあり、大きな寺のような当時の門構えをそのまま入り口として残してあった。しかし、一步門を入ると近代的なアプローチがあり、目の不自由な人のための案内路になっていた。車椅子もゆつたりと入ることができる。

館内もバリアフリーになっていて、書棚の間は広く、カウンターも低い。ただし、あまり「障害者」という言葉が強調されていない。トイレにも「コスモ・トイレ」と書いてあり、「誰でも同じように使える」というバリアフリーの考え方があったのには共感を持った。『図書館雑誌』にも障害者サービスに力を入れている図書館として、豊岡市立図書館のレポートが掲載されていたが、設備だけでなく資料なども、点字本、録音図書などをたくさん揃えている。それでも、利用者は多くて、常連の利用者はすぐに読み終わってしまうので、もっと揃えてあげ

たいと語られる姿勢もうれしかった。

私も友人の中国児童文学者の中由美子さんから、自分の翻訳した本の録音図書をいるところがないかと言われていたので、早速連絡をして寄贈してもらうことになった。

とにかく窓が大きく明るい。資料については、まだ新しいだけに揃えきれていないと嘆いておられたが、旧図書館時代に集めていた郷土資料は役に立っているという。障害者サービスに力を入れていることは先に述べたが、児童サービスも旧図書館時代と同じように充実していて、児童図書コーナーは低い書棚と表紙を前に向けた絵本棚とかわいいうテーブルセットなど楽しいものになっている。丁度、近くの幼稚園児たちが来ていて、楽しそうに本を読んだり遊んだりしていた。何より、熱心な担当者ボランティアの人たちのよい連携がこの図書館を支えていると感じた。

図書館を詳しく説明してもらった後は、村尾さんの案内でおいしい出石蕎麦を食べに行った。8年前案内して頂いた出石であまりにおいしいので、小さい皿とはいえ、私は20皿ほども食べてしまったことを思い出した。

この豊岡市立図書館訪問は、懐かしい思い出とともに楽しい時間となった。おつきあいして下さった松尾さんをはじめとする図書館の皆様感謝しつつ、図書館を後にした。

今、豊岡市は、この地にあることの良さをアピールし、文化を発する町として努力されていることがうかがえる。夜はライトアップされるという「蔵の図書館」は町の人たちのものであった。

(しもやま・しほこ 本学非常勤講師)

# 中国東三省訪書の旅



岡村敬二

## はじめに

2001年10月9日から17日まで、九州大学松原孝俊先生の「東三省図書館所蔵日本古典籍の書誌調査」に同道し、国文学研究資料館入口敦志先生、九州大学院生金廷実さんと共に、東三省訪書の旅に出かけた。まず旅程と調査見学機関をあげておくとおつぎの通りである。

9日(火) 関空から出発

10日(水) 午前 遼寧省図書館、午後 中国医科大学図書館

11日(木) 終日 遼寧省図書館

12日(金) 午前 遼寧省図書館、午後 瀋陽市図書館

13日(土) 午後 哈爾濱市図書館

15日(月) 午前 吉林大学図書館、午後 東北師範大学図書館

16日(火) 午前 吉林省図書館、午後 長春市図書館

17日(水) ソウル経由で帰国

わたしにとって東三省は、はじめての旅行であった。

瀋陽に着いた初日の夜に、遼寧大学の馬興國先生と夕食をともにする機会があったのだが、自己紹介かたがたそのことをお話すると、それでは満鉄図書館の研究者とは言えないな、と笑って答えられた。その通りである、旧「満洲」の地で、つまり実地に調査・研究することなく満

鉄図書館や満洲国の文化事業を研究している、といえはそれはまったく不十分とのそしりを免れ得ないところであろう。

しかしながらわたしには、少しの言い分と小さな自負を持ち合わせてはいた。

昭和58年に、たいそう出来の悪い満鉄図書館の論文を書いて以来少しずつ勉強し、平成元年2月に、「満鉄図書館 - 歴史とその蔵書」と題して一九世紀倶楽部という京都での研究会で発表した。この研究会には故吉田光邦先生も出席しておられてご批評いただいたのだが、それがわたしのささやかな宝物になっている。それに力を得て、日本に保蔵されている資料を読み進めながら満鉄図書館や文化機関のことについて論述をおこなってきた。その際、当時の勤務先であった大阪府立図書館(中之島図書館)には、同じ図書館業界ということで、また大阪府立図書館も戦前は高名であり、満鉄図書館を中心に、「満洲」の資料集積機関からの寄贈が数多くありそれが保存されてもいて大いにありがたかった。

わたしはこれまで長く図書館に司書として勤務し、いくつかの図書館を訪れる機会があったが、その都度わたしは、その図書館を見学する、ということではなく、できるだけその図書館で調べものをする、ということをしてきた。そうすることではじめて図書館を訪れた



ことになり図書館を見たことになる、と考えたからであった。

またわたしは、図書館司書という身分であり、いわゆる専門の研究者というわけでもなく時間的な制約も確かにあったのであるが、わたしには正直いってそのことへの不遇感などはなかった。身近に豊かな蔵書があり、書庫に入れば明治37年開館以来の、そしてそれ以前の古典籍などを含めて約100万冊（府立夕陽ヶ丘図書館を合わせると約150万冊）の蔵書が所蔵されており、わたしが必要としていた資料も寄贈・購入分ふくめてかなりの点数が保存されていたからである。わたし自身も司書ではあったが、このように永きにわたり営々と資料を収集・整理し、蓄積・保存して目録を作成してきた先達の図書館司書に対して、ただただありがたいことだと感謝していた。そしてわたしは、幸いなことに在職中それまでに論述してきた論文を集めて、『遺された蔵書 - 満鉄図書館・海外日本図書館』（1994年12月 阿吽社）を刊行することもできた。

この間わたしはずっと、「満洲」の地に「遺された書物」たちとその地で邂逅せねばと考えてはきた。しかしながら正直なところ、いささか怖くもあり、まだまだ正面向いて対面するには自身の体勢がいまだ整っていないのではないかとおそれていた。

その間に、東三省の図書館では、少しずつ資料の整理もおこなわれてきたようであり、また井村哲郎氏はじめ中国を訪れた研究者がその報告を書かれるのを目にしてきた。そして今回、松原訪書隊にお誘いを得て、自身の体勢が整ったというわけでもなかったが、ご縁をいただいたということで同道させていただくこと

になったのである。

わたしはこれまで、優柔不断という面も確かにあったが、何と言ったらよいか、言ってみれば堪(こら)えてきた、という気分がある。他から見ればなにをつまらぬことを、と思われるかもしれない、しかしながらわたしには、どこかで節目をどこかに節度をといた気分がどうしても抜けきれなかった。馬先生から先のようにいわれて、いささかうろたえはしたものの、自分には幾分かの自負がある、と同時に感じたというわけであった。

今回の訪書旅行はたいそう意義深く楽しくもあったが、なによりの収穫は、訪れた東三省の図書館で、資料つまり「偽満時期旧日文資料」についてそれを整理し目録などに組織化してこられた図書館司書たちと実際に会うことができたということだった。そしてなによりそれらの資料が、彼女たち彼たちによって、図書館ごとにいささかの差はあるものの、カード目録や冊子体、またデータ化されて利用できる状態に整備されていることをこの目で確認することができたことである。この事実はわたしにとって、体勢を整えまた堪えてきたという気持ちと充分見合うものであり、我慢してきてよかったと心から感じているところである。

今回の東三省訪書旅行でわたしが目標としていたことがらは、次の点であった。

- 1、満洲の地で、偽満時期に集積され、戦後すぐに接收され、一部はソ連に移送されながら、内戦をくぐり抜け、幾多の変遷を経て現に東三省に所蔵されてきた資料群の、現代的な蓄蔵の状況を確認すること。

- 2、満鉄諸機関だけでなく満洲国および関連部署、民間企業、民間の出版社を含



めて、偽滿時期の資料集積機関の蔵書目録や増加図書目録、新収図書目録などを確認し、接收直前の集積の状況をできるだけ正確に把握すること。

3、戦後中国での接收から現在の保蔵にいたるまでの変遷の過程をたどれる資料を入手すること。

4、偽滿時期旧日文資料を閲覧するための、カード目録や冊子目録、データベースなど、各館のツールを確認すること。

これら事前に目論んでいた目標は、いずれも重要でありまた多岐にわたることであり、必ずしも十分に達成できたわけではない。ただその足がかりはできたと考えている。今後精進を重ねて努力をしていきたい。以下、今回訪れることのできた図書館で、自分の調べ物をしつつ見聞きしたことがらについて日程を追いつつ述べていくこととしたい。

## 遼寧省瀋陽

10月9日（火）

昼過ぎに瀋陽の空港に着き市内のホテルへチェックイン。ホテルは多くの中国人でにぎわっていて、部屋では電話線につないでインターネットなどにより情報収集や連絡をとっている様子がドアの開いた部屋からうかがわれる。以前にはホテルは外国人ばかりであったが、これが改革解放というのか、幸せになれる者から幸せに、ということなのか、活気がみなぎっていてずいぶん進んできた様子を肌で感じることができる。明日からの図書館での、旧日文図書など資料閲覧や調査でも思いがけないことがあるのではないかと予感させる。

夜は遼寧大学の馬興国先生と「野生菌菜美食天地」で会食、旧日文図書閲覧や



写真1 柚木常盤編『夏草冬虫図』（享和元年跋刊 大阪府立中之島図書館蔵）

複写の様子をうかがった。きのこに関しては、やはり松茸菌と羊肚菌が高価なもので、きのこの王様、女王様というらしい。12種類ほどのきのこを注文し冬虫夏草（写真1）のスープにより各自の鍋で食す。きのこを入れる前にスープを充分味わうのが正しい方式なのだそうだ。きのこが入るとスープが濁りその味が曖昧になるので、生で味わうことが肝要、スープがなくなるとこれはおかわり自由とのこと、なるほどと納得した。あわせて冬虫夏草酒もいただく。

10月10日（木）午前 遼寧省図書館

本日からいよいよ図書館での資料調査、午前中は遼寧省図書館である。各図書館とも、松原先生が前もって話を通しておいてくださるので、わたしは探検の先鋒隊が踏みならした道を歩んでいだけで、これはまことにありがたく申し訳ないがぎりであった。

遼寧省図書館の旧日文資料は、戦後東北各地で接收した資料をまず哈爾濱に集積して開館した東北図書館がその後瀋陽に移したものを前身として成り立っている。現所在地は、東陵区万柳塘路111号（郵編110015）で、文化路という道路を突き当たった三叉路に聳え立っている。両翼を従えた中央の建物半ばに赤の下地に白抜きで「遼寧省図書館」と大書した



写真2 遼寧省図書館

看板があり、その屋上にはなんと、緑色のマンションの広告塔とおぼしきものが立っている。規模の大きさとスケールの大きさに度肝をぬかれた（写真2）。

図書館では、館長への表敬訪問のあと、特蔵部主任・副研究館員王清原氏、ご担当の孫粵秀氏に案内いただいて、4階へ。そこで、松原・入口両氏の古籍組とわかれてわたしは6階の書庫に特別に入れていただいた。

遼寧省図書館を含め東三省の偽滿時期旧日文図書の所蔵を知るためには、大連市図書館社会科学参考部 黒龍江省図書館採編部『東北地方文献連合目録』（1983年 大連市図書館、日本での刊行は『旧満洲東北地方文献連合目録』1990年 葦書房）が身近で便利である。わたしも今回の調査で、まずこの目録により、日本に所蔵がなく東三省にのみ所蔵がある資料を中心に、閲覧すべき資料を絞っておいたのだが、幸い書庫で直接資料に触れることがなかったので、総記の部門を中心に現物を見ていった。連合目録にない資料ももちろんあってありがたかった。

カードに関しては、4階の北側隅に「日文分類目録（東北法）開放前」との見だしのカードケースがあり（写真3）、たまたま総記部分のケース2本は6階に

て作業中だったようで、それも見ながら現物にあたることができた。はじめにまず現物を順次みていったのであるが、やはりカードでもう一度確認してみると見逃しているものもあって、これもうまくことが運んだ。

さてこの6階の旧日文図書であるが、書架の数を数えて見ると35列、それぞれが10連で7段、もちろん空いている段もあり資料の厚みもまちまちであるが、仮に1段25冊とみると、約6万1000冊ということになる。もちろんこれはまったくの大雑把な数ではある。

資料は、東北図書館時代に再整理されたとおもわれ、その分類法で配架されているようだ。そして旧所蔵機関の、たとえば満鉄図書館時代の分類およびラベルも貼付され残っている。それによってももちろん旧蔵機関がたどれるわけであり、このことに関しては、これら偽滿時期旧日文図書の一部が、じつ是北京のある大学を中心に一部払い出されて日本にもながれてきている。たとえば、蔵書印から、満鉄長春図書館・満洲国移管後の新京図書館・東北行營經濟委員会（国民軍）・東北財政經濟委員会調査統計所（解放軍）・中国人民大学、といった書物の流転の運命をたどることも可能である、と



写真3 旧日文図書カードケース

いう事実は出かける前から知っていた（「本の言い分」『京古本や往来』89号、「蔵書印から外地での書物の集積とその遺産に想いをはせる」『みやこ乃評判』第25号）。しかしながらこうして、それぞれの書物がみな来歴を持ち流転を重ねて現にここに在る、という事実に全くもって圧倒されてしまう。

今回の訪書では、集積旧蔵機関の蔵書印などはあまり見ないようにしようと決意してきたのだが、どうしても目がいつてしまう。満鉄奉天図書館（昭和12年2月）、瀋陽鐵路管理局図書館（1950年1月）、新京特別市図書館（康德8年8月）、満洲電業股C有限公司、中国企業股C有限公司（民国35年4月）、南満州鉄道株式会社巡回書庫、満洲国立奉天図書館、満洲国立中央図書館、といった蔵書印が散見される（それぞれの図書館の歴史については、拙著『遺された蔵書 - 満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』阿吽社1994年参照）。

書庫で資料をみていると担当の司書から、これら旧日文資料の閲覧は有料です、1冊見るのに2元です、といわれて驚いた。前日夜のきのこ鍋のときに、馬先生がこのことに言及され、また複写も片面ずつでたいそう高いこと、だがこれも財政的な面を含めて図書館みずからの自助努力の方策でもありやむを得ない、と事情を聞かされてはいたのだが、実際そのように通告されるとやはり言葉につまってしまう。だがすぐさま納得してノートに目録をとった数を申告することにした。

10月10日(水)午後 中国医科大学図書館

午後は中国医科大学である。遼寧省図書館を退出してタクシーに乗り、通訳の金さんが運転手に昼食のお勧めスポットをたずねてくれて案内されたところは「華夏民俗村大酒楼」、華夏は中国の古称

である。野菜中心の注文をして料理もおいしくいただいた。この店では客への挨拶が徹底していて、すれ違う従業員はみなにこやかに挨拶してくれる。それは外国人に対してというわけではなく、店のモットーのようであった。もらって帰った名刺の裏をみると、「華夏人のモットーは社会に優良な食材を提供しよい仕事をする事、お客様を尊重する」といった意味のことが記してあり、民営化のなかでこうしているのどと工夫し、店を繁盛させていっているのだとよく認識したことであった。

さて、中国医科大学である。ここはもと満鉄が明治44年に奉天附属地に創設した南満医学堂で、それを基礎とし大正11年の大学令をもって設立された満洲医科大学がその前身となっている。蔵書はもちろん医学書がその主力であるが、とりわけ大正15年5月に京大から迎えられた黒田源次ら中国医学研究所（のち東亜医学研究所）により収集整理に力を注いだ中国医書・本草書が名高い。なかでも（昭和4年の購書の折であろうか）満鉄大連図書館が購入した古書3万冊のうち満鉄図書館に必要でないと言われた医書6000冊が寄託されそれが研究所の蔵書の基礎となったという（岡西為人『中国医書本草考』のはしがき、真柳誠「甦った中国医書誌の研究」など）。ちなみに黒田源次は第3代、岡西為人は第5代の附属図書館長であった。

図書館は、満洲医科大学創立25年を記念して建てられたものをそのまま使用しているようだが、この図書館もしばらくして新館に移転の由である（写真4）。蔵書は学術雑誌が70%をしめているといい、敗戦時には7万余冊であった（「附属図書館の歴史」『柳絮地に舞ふ』）。



写真4 中国医科大学図書館(旧満州医科大学図書館)

当日は、一斉清掃日・整理日にあたっていて閲覧はかなわず、書庫の中を見せただけにとどまったが、「附属図書館の歴史」が述べているように関連分野の論文を再編し製本した雑誌も数多く並んでいた。日本語資料は、いわゆる偽満時期旧日文図書以外の、戦後に受け入れたものも混排となっていた。ラベルは、満洲医科大学図書館が赤ラベル、瀋陽医学院図書館が黒ラベル、中国医科大学も黒ラベル、ということである。

書庫内の見学を終えて引き上げるべく再度館長室にもどってみると、女性館長がみずから雑巾をもって出窓のぼり清掃している場面にでくわした。お国柄とはいえ、なるほどそういうものなのだ、と納得した次第であった。

少し早く図書館を退出したので、松原先生に案内されて、張学良邸を参観した。今では「張学良旧居陳列館」といい、満洲事变以前を含めて写真や解説により日本の侵略時期の展示がなされている。なかには「日本軍の承德避暑山莊鐘鼓楼等古建築破壊および珍貴文物の掠奪」や「日本軍による張学良官邸の財物の搶掠」といった興味深い写真もあって展示も興味深いものであったが、わたしにとって何より圧巻に感じ想いを深くしたのは

「張氏帥府大青楼」の建物、つまり旧満洲国立奉天図書館の建物であった(写真5)。

満洲事变時に満鉄奉天図書館長衛藤利夫は、司書植野武雄を伴い、関東軍や満鉄公署・憲兵隊・中国側治安維持会などを訪れ奉天宮殿の四庫全書の保護と警戒を依頼したのだが、この建物はのちにこの地域の遼寧東北大学や萃升書院、故宮の図書や殿版図書を接收・保護・整理するという大義をもって昭和7年6月に開館することになった図書館であった。これは関東軍先行の文化事業ともいえるべきもので、後刻外務省文化事業部はこれら関東軍の事業を追認せざるを得ず、しかしながら当時文化事業部に提出されていた内藤湖南や服部宇之吉らの、満洲国に文化研究機関を設置すべしとの要望は留保のまま、当面のところこの国立奉天図書館を運営し日満文化協会の活動を展開しながら博物館設置など文化事業を進めていくことになった、その図書館である。

こうした事情で創設なった満洲国立奉天図書館の旧址でもあり、それら歴史的経緯を持った建物を前にして感じ入ったということも事実であるのだが、わたしは少し違うことを考えていた。改修中で近くにも寄れない状態ではあったが、こ



写真5 張学良旧居陳列館(旧満洲国立奉天図書館)



の建物をみて感慨ひとしおであったのは、そして故宮の文溯閣を遠めから眺めた折りにも同様の想いかられたのであったが、その気分は、「何ということだろう」という言葉に言い表わせない感慨であった。なかなか理解されないとは思うのだが、これがわたしのこの時の正直な気持ちであった。

わたしは、冒頭でも少し述べたように、現地を踏むことなく、資料だけで、つまり外務省外交史料館の起案文書や資料、それに満洲から日本に寄贈されてきた原資料を中心に、これまで論述をおこなってきた。この満洲国立奉天図書館についてもその歴史的な事象を記述し蔵書について検討してきた。現地を踏まなかったということには自身のいろいろな事情が反映しているとはいえ、このこれまで堪(こら)えてきたという気持ちとともに、変な言いかただが、自分でまずまずよく論じてきたという気分と、呆れて物が言えないという気分がないまぜになって、二重の意味で「よくも書いたな」という想いがこみ上げてきて、何とも言えない気分に乗られた。歴史的なことがらに関わる「論述」と「現実」とのはざまで、建物を前にして、まず正しかったという気持ちと全然違うではないか、という相矛盾する感慨に乗られてわたしは混乱してしまったのであった。松原先生はそれを見てとられたようで、感無量ですが、と声をかけてもらってわたしはようやく救われほっと一息ついたのであった。

気を持ち直して瀋陽故宮に向かうべく朝陽街を北上した。通りの向いに、もと満鉄奉天公所でのち瀋陽市図書館となった建物を見る。3日目の午後ひとりで資料閲覧に出かけることとなる瀋陽市図



写真6 瀋陽市児童少年図書館(旧満洲国立奉天公所)

書館が北京街に新築されたので、この建物はいま瀋陽市児童少年図書館として使われている(写真6)。

夜は老辺餃子館で餃子を食べた。いくつも種類はあったが、清国時代から100年以上の歴史を持つというその名の餃子がことのほかおいしかった。異国で歴史を体感しながら食するというわけで舌も幻惑されているのかもしれない。近年は焼き餃子というのもあるそうで、この店では海鮮(海老のはいったもの)を焼きで提供しているという。海鮮という名にひかれて注文したゆで餃子もそうであったが、この焼き餃子ともどもわたしにはあまり感動はなかった。

10月11日(木)終日 遼寧省図書館

本日も朝から省図書館である。6階の書庫に入り本をみる。旧日文図書の閲覧は1冊2元、複写は1枚5元といわれていたので、貧乏性のわたしは資料をよく選んでノートをとることにした。複写も箇所指定など面倒そうだったので、できるだけノートをとっていくようにした。今回は、偽満時期資料集積機関の図書目録類をできるだけ多くリスト化することも目的のひとつとしていたので、それらを中心にみていった。そこで少し気がついたこと、感想として持ったことが

らを以下に少し書き出しておく。

1、「満洲」の地では、図書館や満鉄各部署以外にも満洲国各部署や企業なども資料室を持っていて思いのほかたくさん目録を刊行していること。

2、このように企業なども目録をさかんに刊行したということは、企業資料室も時局に駆られてのことであろうが、ほかに、資料室員や司書たちが異国での資料収集の仕事に対して伝道者的ともいえる使命感を持っていたのではないかと感じたこと。

3、そして、満洲国などでも各部署で目録を作成しさらに連合目録を編集しているのだが、これは満鉄図書館の日々の図書館業務研究会や目録編纂の営為などが影響しているのではないかと。

4、同じことなのだが、満洲国では資料聯合会が組織されていて、今想像しているよりはるかにネットワークというものが組まれていたこと。

5、そして、これは他の図書館で資料を拝見したときにも実感したことなのだが、戦前に資料を収集した人々、それを整理し提供してきた人々だけでなく、戦後中国側の接收のち日本人留用となり資料整理を行った日本人たち、さらに解放前・解放後を通じて東北図書館などで敵国が遺した膨大な資料を整理し目録をとった人々、それを現在に至るまで保存し再整理しつつカードを作成し目録など編纂し続けてきた司書たち、これら資料に関わったひとびとの営為に深く想いを至らせねばならない、ということであった。

さて、この日の昼食は、松原先生が他のところで折衝に行かれたので3人となった。図書館の近くの食堂で、また野菜

中心を心がけて、茄子炒めや豆腐などを注文、ただ主食として餃子や麺をあわせて注文するとどうしても多くなってしまった。われわれとしては2分の1くらいの量でちょうどよいように思ったことだ。

午後もひたすら資料を閲覧して夕刻に退館、車で元満鉄奉天図書館の建物へと向かう。今は中国鉄路工会瀋陽鉄路局図書館（和平区南一馬路84号）となっているこの建物へたどり着くのにはずいぶん苦労した。タクシーの運転手もまた付近のひと、この鉄路局の図書館は知っているひともなく、近くと思しき場所で降りて金さんが主に老人に尋ねてくれてようやくたどり着いた。着いてみるとわれわれのホテルのほとんど裏にあたる場所で落ちていて地図で当たればよかったと思った。

場所は昔の千代田公園、いまは中山公園の斜め前のあたりで、この南一馬路は自由市場となっていて朝早くから露天を中心のにぎわう場所である。野菜や果物、豚肉や羊、衣服から日用品まで何でもそろっているようだ。羊の頭と思しき頭蓋も並んでいてびっくりする。夕刻であったので写真をとらずにただ眺めるだけにしたのだが、モルタル塗りのスパニッシュ様式とされる建物（西沢泰彦『満洲都市物語』）の左翼の一部は壊されていて羊鍋の店となっていた。勝手な感想ではあるが、無残という気持ちを禁じえないところだ（写真7、8）。

1度ホテルにもどって夜は、松原先生の手の内にある瀋陽コリアタウンの朝鮮家庭料理の店に連れていってもらって食事をする。あたりをみなで逍遥したが、なるほどコリアタウンというのはこういうものかと、よい見聞となった。





写真7 旧満鉄奉天図書館（『満鉄付属地経営沿革全史』大阪府立中央図書館蔵）

10月12日（金）午前 遼寧省図書館

朝少し早く起きて食事まえに昨日の満鉄奉天図書館の建物を見に出かけた。ほんとにホテルのすぐ裏で、どうしてこんなに迷ったのだらうと不思議に思ってしまう。そして昨日の夕刻とはずいぶん違う雰囲気です。朝市が並びすごい活気である。建物正面から眺めて裏に回って書庫らしきところから見ると、少し喧騒から離れたせいか、昔の衛藤らが働いていた図書館という面影を感じることもできる。今は満鉄関係の統計書などを所蔵しているらしい（井村哲郎「中国の満洲国関係資料」『満洲国の研究』）。朝市でにぎわう通りからもう一度正面を眺めて見ると、十分な時の流れも歴史の経過も確実に存在していて、なにかその事実を認めて納得しているもうひとりの自分を発見し、なにがなんだかわからなくなり、ただただ、当惑してしまうばかりだった。

この日は午後から各自自由行動ということになったので遼寧省図書館はこの午前の作業で終了だ。少し早めに複写を頼んで、あとは余裕をもって旧日文圖書のカード分類目録の総記部分を1枚ずつ繰ってみた。そしてさらに満洲国文化運動関係の圖書をいくつか見たりした。これは以前から気になっていたことなのだ



写真8 現瀋陽鐵路局図書館

が、満鉄各部署や図書館、満洲国各部署や企業などはその分類方法がさまざまで、分類表をどこかで1度整理してみないといけないうらためて感じた。分類法を見れば蔵書印がなくても旧蔵がわかる場合もあるし、こまかなことだがラベルの色や図書記号によっても識別が可能なのもある。今回もまた気になったのだが、分類法はできるだけ見ないことにして作業を進めた。

なお複写については、先に述べたように1冊5元だが、館発行の圖書の複写も必要となって、見開きページでのコピーをお願いしたところこれは1枚2元8角とのことであった。領収書を見ると、「提供資料費」として、複写と閲覧料あわせて合計470元であった。午前で遼寧省図書館の作業を終え、お世話になった司書の方々にお礼を申し述べて退出した。ホテル近くで、日本流に言えば簡単に立ち食いうどんでも、という感じで、喜多川という日本料理の店に入った。わたしは肉うどんを注文したのだが、だしが中国風でまた豚肉でもあり、うまきはなかった。

10月12日（金）午後 瀋陽市図書館

午後は各自自由行動で、わたしはタクシーで瀋陽市図書館に向かった。中国で

はひとりでタクシーに乗る場合はみな前の助手席に座ってなんだか楽しそうに運転手と話をしている。今回運転手が前のドアを開けてくれたのでわたしもそこに座ることにした。行き先をなんとか告げて走り出し、何国人？と聞くので日本人を答えて、あとはわからず何も言うこともなく沈黙。地図を片手にこれは何路、あれは何街、と言ってみても会話は続かずそれで終わり、いささか気詰まり、何だか聞いてきて何だか答えるのだがどうもトンチンカンなようでお互い、はははと笑いあっているうちにありがたいことに目的地に着いた。

瀋陽市図書館（瀋河区北京街5号、郵便110013）は、先に述べたように、城内の図書館からこちらに新築移転してきた図書館である。遼寧省図書館で孫さんに、困ったらこの人を訪ねるとよい、といわれていたので、外国語資料室ですぐさまそのメモを示すと、閲覧者名簿に氏名を記入するようにいわれ、階下の参考資料室に案内された。事前に『東北連合目録』で調べてきた資料の閲覧をしたい旨を苦勞して伝え、カードで請求記号を調べようとすると、どうも職員の方で確認してくれるようで、カードケースを抜いて検索してくれた。書名カードは画数順で、簡体字などがあってずいぶん難航した。6件を予定していたのだが、2件ほどしかででこず、そのうち満日文化協会の満洲文化事業で満洲国固有の文化振興へと方向を転換させていく契機となった『第1回訪日宣詔紀念美術展覽会図録』など、どうしても見たいとおもっていたので、カードの標目のとり方が「第1回...」から、「訪日宣詔...」から、などいろいろではないかと申し出てもう一度捜しても

らうとうれしいことに出てきた。時間がなかったので今回はカードを1枚1枚みて確認することができなかったが、機会があればやはりそうした労を惜しんではいけないな、と実感した次第であった。

『新京図書館月報』が、揃いではないが所蔵があったので閲覧した。この月報には「瀋陽市図書館蔵書」の印記のほか「康徳5年3月8日 奉天省立図書館蔵書之章」の印があった。ほかに「満鉄調査局交通調査室資料」「奉天市立八幡町図書館之印」など蔵書印のある資料もあった。資料は大変きれいで、書庫を見せてもらったわけではないが、大切に保存されている様子がよくうかがわれた。

閲覧の前にあらかじめ閲覧・複写にかかる費用を尋ねたところ、相談費である「諮詢費」が20元、毎冊閲覧費が各5元、複写が毎頁3元で、この図書館でかかった費用は合計で439元6角であった。あとから領収書などをよく検討してみると、どうも複写料金自体は1枚3角で、1枚3元というのはこれら旧日文図書についての複写手数料保護費ということのようである。大変面倒な仕事を親切にこなしてくださりお世話になったのは、参考図書室の梅季春さんと李さんと、後日閲覧にくるときにはあらかじめ電話をして来るように、と連絡先を教えてもらい退館した。

夜は通訳役の金さん抜きで3人での食事となった。ホテル前の中華路を隔ててもう一本向こうの南一馬路でぶらぶらとして、先に訪れた旧満鉄奉天図書館横にあった「天天活羊」店で羊のしゃぶしゃぶを食べることにした。ウェイターが来てくれたのだがなかなか注文ができず、メニューも難しく注文するのに難航

し、近くで食事をしている人のテーブルから美味そうなものを、あれ、これ、と注文した。青菜もよろしく頼んでさて鍋をと思っているのだがなかなか理解されず、注文はこれで済んで食べたいのだ、ということの説明してもなかなかOKが出ず、なにかもう一つ大事なことを決めないといけなかったのかもしれないのだが、よくわからぬままに、ようやく羊、ラム、豚と青菜、貝、きくらげ、春雨などがやってきた。羊は1斤500グラムで、これがまた美味くて、お代わりもした。さらに青菜は注文しなくても羊についていることがあとから判明しまたお代わり自由ということでこれも激しく食した。3人でたらふく食べてビールも飲んで会計は一人当て25元弱くらいだっただろうが、ともかく安くて美味くて、注文にたいそう時間がかかり難航を重ねたのであったが、苦勞の甲斐あって充足した晚餐であった。

この「天天活羊」の店を出るとすでに暗くなっていて、夜になっても露店は相変わらず繁盛していた。店のネオンサインを見上げるとそこは、旧満鉄奉天図書館に隣接していて、つまり図書館の左翼の一部がどうもこの店と競合して削り取られたことになった気配である。今こうして羊を食してそれはずいぶん美味くて満足したのであるが、なんだか複雑な気分になってしまう一夜であった。

## 黒龍江省哈爾濱

10月13日（土）午後 哈爾濱市図書館

この日朝早く、瀋陽をあとにして飛行機で哈爾濱に向かう。哈爾濱は1日の滞在でしかも土日にあたって少しくスケジュールが窮屈であるのだが、これはわ

たしが、秋学期始めに1週間休講にして訪書旅行に来たので帰国を早めてほしいと無理をお願いした結果である。

哈爾濱市図書館（哈爾濱市学府路49号 郵編150080）近くで、黒龍江大学の経営なのであろうか本屋などもいっしょに入っているピルの「学府酒店」で早々に昼食を済ませて図書館にむかう。図書館では李冬梅副研究館員に迎えてもらって館内を見学した。土曜日なので旧日文図書の見学は休止とのことである。旧日文図書については分類順のカードがあると言われたように思うが、現在では、書名索引付きの中文日文図書・期刊・古籍線装図書・中文新聞・マイクロなどを収載した『館蔵地方文献書目 1902-1990』が編纂されていて検索に便利となっている。また、いただいた『読者指南』によれば、地方文献閲覧室において館蔵の新聞（建国前の中文地方新聞を含む）と地方文献資料、それに研究的価値の高いとされる「日偽滿洲国時期図書報刊資料」が閲覧できるという。図書館開館時間は月曜が12時 5時、火曜から日曜は8時半 5時だが、地方文献閲覧室は先述のように土曜休室の由である。

また館の「簡介」によると、哈爾濱市図書館は、20世紀はじめに私人が資料を収集し創設したものを1927年4月に市の所管となし館名を哈爾濱特別市図書館としたこと、1949年2月、東北図書館（現遼寧省図書館）が哈爾濱から瀋陽に移ったので一曼街の旧址に残された資料のうち日文図書は教育局の接收となりその基礎の上にとって哈爾濱市図書館が1950年10月に正式開館したことなどが説明されている。そしてこの新館の開館は1991年1月のことで、記載されているウェブの

アドレスは、<http://www.hrblib.net.cn>である。

見学のあと李主任に資料の目録情報の入力についてお尋ねした。これはつまり、全国または東三省所蔵の旧日文図書を横断する総合目録を作成することが構造上可能なかどうか、といったことをお伺いしたかったからある。お話によると、これは中文図書の事情だとも思うが、大学図書館と省市図書館ではそれぞれ入力フォームが異なっているようで、大学関係は清華大学のものを、省市図書館では国家図書館のものを使っていること、入力は館それぞれがその仕様に従って入力している、というようなお話だったと思う。わたしの感想では、中国の旧日文図書の目録化について、所蔵各館がそれぞれに日本の機関から補助金を得たりして、それぞれに作成しているような印象を持っていて、今後できれば共同作業・共同利用といったsharedの考えにより、効率よく入力しその後も所在情報などの情報が横断的に確認できるような総合目録を編纂することができれば、と考えるの質問であった。

4時ごろ館を退出して夕刻、鉄路局前に位置している鉄路図書館に向かった。この建物は現在は哈爾濱鉄路局倶楽部の建物で保護建築物に指定されている（写真9）。建物の右翼半分は舞庁（ダンスホール）となっていた。館内入口に哈鉄図書館の紹介文がありそれによると、1902年東鉄路時代に建てられ、初めは松花江市閲覧館といい現在では全国工会系統文明図書館としてその事業を展開、蔵書数30万とある。図書館は土曜日4時までで、公共図書館ではなく鉄路用の図書館ということもあってガードが厳しく、



写真9 哈爾濱鉄路局図書館（旧東支鉄路倶楽部、スングアリー市図書館）

中にも入れてもらえなかった。明日館長と折衝して見学を要請することとし、付近を散策した。そこで出会った鉄路局の幹部らしい人から、近くに古い建物で娯楽室があると聞いてそこへ案内してもらった。さらに戦前生まれの古老にも加わってもらって記憶をたどってもらいながら説明を受けた。

案内された建物は現在娯楽室となっていて、それは1930年に満鉄が接收することになった「哈爾濱鉄路図書館」ではないかと思われた。この図書館のことも以前に書いたところだが、もう一度『哈爾濱鉄路図書館要覧』（昭和12年）などで整理してみる。全二者の図書館史記述もそれぞれ微妙に作風が異なっていて、それはそれで興味ぶかいところだ。

『概観』によると図書館は1902年の設立で、当初は東支鉄路倶楽部として設立、その名をスングアリー市図書館と称した。1925年には東支鉄道管理局が中央図書館設置の必要を痛感してこの倶楽部図書館を母体とし北満鉄路中央図書館を創立、1930年に現址（当時の住所は南崗大直街鉄路局前）に移転した。その際通俗図書は他に分置し当館は専門図書のみ在所蔵となる。その後閉鎖や没収などもあった



のだが、1935年3月の北滿鉄路の接收にあたり、他の鉄路所属の図書も含めて移管継承されることになるのである。そして接收後名称をとりあえず哈爾濱鉄路中央図書館とし、のち哈爾濱鉄路図書館と改称、さらに1936年には、職制上この鉄路図書館をそれまでの滿鉄哈爾濱図書館と合併して、それぞれに哈爾濱鉄路局直屬参考図書館および埠頭区分館としたのであった。

1935年の接收のときに任にあたったのは、田口稔大連図書館員、山口吉康奉天図書館員、大橋国太郎奉天鉄路局員らで、田口はその一部始終を、感激に満ち興奮さめやらぬ筆調で『接收記念誌 第1冊 更正の哈爾濱鉄路図書館』『同4冊 北滿鉄路中央図書館の接收』などに記述し記録している。そこには写真も掲載されていて、それを今回案内された建物と比較してみると、ずいぶん様子が異なっていて確実とは言えぬまでも、この建物が、北鉄から接收され田口らが接收当日にソビエトの旗を降ろし鉄路局の旗を屋上に掲げたという北滿鉄路中央図書館、つまりその後の哈爾濱鉄路図書館ではないかと推測してみた(写真10,11)。屋根には、滿鉄のロゴを削り取ったとおもわれる跡



写真10 旧哈爾濱鉄路図書館(『哈爾濱鉄路図書館要覧』天理大学附屬図書館蔵)



写真11 旧滿鉄の建物

もあり、いずれにせよ北鉄接收後の滿鉄関係の施設であったことは疑えないと思う。

その後あたりを散策して1度ホテルにもどり、夕食は1925年創建のロシア料理店「華梅西餐庁」にて哈爾濱ビールでボルシチなどを食した。この店は国営のようで、従業員は注文を聞くときと料理を運ぶとき以外は客用のテーブルに腰掛けて話しをしている。わたしたちが会計を済ませて帰るときには挨拶もなかった。

10月14日(日)移動日

本日午後は長春への移動の予定である。そして午前中の10時に哈爾濱鉄路図書館へ向かうこととなっていたので、それまで短い時間ではあったが自由行動。わたしは中央大街の建物をもう一度見学しようと思い、まず通りの北の基点となる防洪記念塔まで出かけた。日曜早朝のその場所のアーケードには朝市が所狭しと並んでいて、足をしばられた鶏や解体された豚肉、お茶や果物、野菜やパン、電気部品や時計など、まさに露天百貨店の様相で、なかには書かれたメモを見ながらお使いに来ている少年もいて、ほほえましかった。わたしは並んでいる露天本屋などについて目がいて眺めていると、3元均一といったコーナーのほかに

他の新刊書店でも見たような新刊も置いてあるようだった。

中央大街に入ると、新華書店などロシア風建物は夜とはまた違う趣があって楽しい散歩となった。途中の馬達爾賓館で哈爾濱市街地図を買ったのだが、定価のところ別に10元と定価票が貼付されておりやむなく10元で購入したのだが、後でそれを剥いて見ると実は5元が定価の地図であった。まったく中国ではホテル内は、法外に高い喫茶店など含めてなんだか「治外法権」ともいべき場所ではいささか興ざめではあった。瀋陽の駅で遊覧地図を買ったとき、駅売店のおじさんはちゃんと2元の定価で売ってくれたのに。

ホテルで再度集合して、館長に見学をお願いすべく哈爾濱鉄路図書館に出かける。ところが館長が留守ということで、結局館内に入れなかった。よほど縁がない図書館ということになってしまった。その後、黒龍江省図書館にいったみたが、一般図書を貸し出しているセクションが開いているだけでここも閉館であった。

やむなく昼食をとるべく駅近くの旧ヤマトホテル、龍門大廈に向かう。この建物は、外観はともかくなかに入って見るとさすがに落ち着きをみせている。ここの食堂で昼食をとった。格式の高そうなホテルではあったが、思ったより高くなくておいしかった。よい感じのレストランであったが、窓のところにブルーナのうさこちゃんやどらえもんのステッカーが張ってあって、これには参ってしまった。

本日は長春への移動日で、この旅行はじめての汽車旅行である。寝台列車の下段を座席にして、4人でゆったりと座り、

長春に向かった。

## 吉林省長春

長春は満洲国の国都として新京と改称され、その国都建設のため計画的に都市作りがおこなわれただけあって道路は広くて整然としている。古い都であった瀋陽が、城内を含めてあれこれと町の造作を加えどこか雑然として、それはそれで魅力であったのだが、この都市はまたちがった趣があるのだが、なにかよそゆきな感じがする。

ホテルでチェックインをすませて、夕食に出る。タクシーの運転手にご推薦のお店を聞いて連れていってもらったところは、「川王府火鍋城」で再び羊のしゃぶしゃぶである。この店は若い人や家族連れ、カップルなどで満員、順番を待っている人でごった返していた。あれこれしている内にうまく入れてもらって以外に早く食事にあつた。テーブルについてメニューをみて驚いた、羊肉が1斤(500グラム)8元とある。130円というところか。なるほど順番待ちがこれだけ出ても待って食べるわけだ。おまけに従業員はみな若くて髪の毛を短く切り愛想も非常によく威勢がよい。これも薄利多売方式でサービスを良くするという民営化により店が繁盛した好例であるのだろう。この羊肉1斤8元というのがなんだか衝撃で、これまでのわれわれの「文化工作」における、例えばコピー代1枚5元とか、閲覧1冊ごとに3元とかいうところを、いささか不心得なことだが、この川王府の羊と比較する価値基準になってしまって、なんだか変な気分になってしまった。



10月15日(月)午前 吉林大学図書館

この日は吉林大学図書館(長春市前衛路10号 郵編130012)への見学である。国際合作・交流処から図書館へと向かう。図書館では姜曼莉氏が案内して下さる。この図書館では、偽滿時期旧日文図書のうち「満鉄資料」を抜き出して別置していた。6列ばかりではなかったかと思う。お話しを伺ってみると、「満鉄資料」については現在、北京を含め全国規模の公式的な組織「満鉄資料研究会」を組織して整備しており、近く目録を出版する予定とのことであった(これは『中国館蔵満鉄資料聯合目録』として全30冊にて2002年早々に刊行予定のようだ)。『東北地方文献連合目録』との関連を問うと、これは全部が採録されているわけではないので新たな目録を提供しようということだった。さらに満鉄資料とはどのようなものと定義しているのかと聞くと、満鉄が発行してきたもので、満鉄が所蔵していたものなどはその範囲に入らないとのことだったと思う。

この「満鉄資料」以外の旧日文資料は書庫の別の箇所に配架してあって、そこにも案内してもらった。ここでは旧日文図書は、戦後刊行の日本語図書との混排であった。いくつか手にとって見てみると、満洲帝国外務局図書、満洲電信電話株式会社の図書、東北行營經濟委員会などの印記のあるものなども存在していた。吉林大学はいくつかの大学が合体して成立していることもあって、蔵書の系列は複雑なようであるが、これら図書の分類は基本的には東北人民大学のものに拠っていて1983年以降はあらたに分類法が定まって以降それに統一して整理している。

わたしの関心領域が、偽滿時期に民間で発刊された旧日文図書をふくめ偽滿時期旧日文図書総体であることから、この吉林大学図書館のように、「満鉄資料」という、名前の通ったいわばエリート資料だけを別に整理し目録を作成する、ということにはいささか違和感を持ったのでこのあたりをしつこく質問すると、姜さんはご自身が書かれた「満鉄資料的基本特征」(『世紀橋』2000年第4期)という論文をコピーしてくださった。そのなかに、これが即ち「満鉄資料」として書かれてある箇所は次の通りである。満鉄は40年の長きにわたって中国を侵略しわが国の物資や財富を掠奪することにより政治・経済・軍治・情報を提供したが、その過程において、大量の包羅万象の書刊資料や情報資料、档案資料を形成してきた、それを即ち「満鉄資料」と称する、と。そしてさらに、その満鉄資料の形式的特徴をいくつかあげているのだが、そこに例示としてあがっている雑誌には、『協和』や『満蒙』『満洲評論』などが含まれていて、それらは必ずしも満鉄刊行物というわけでもなく、どこかまだこの定義には消化不良な気分が残っている。いずれにしても、旧日文図書については、こうして「満鉄資料」の形で遺蔵資料を分割するのではなく、名前の通った資料もそうでない資料も、すべてひとしく、目録化することが必要なのではないかとあらためて強く感じた。

10月15日(月)午後 東北師範大学図書館

この吉林大学交流処の一室で昼食をいただいたあと、東北師範大学(長春市斯大林大街110号)にむかった。古籍グループとわかれてわたしは、旧日文図書などの書庫を持つ別の建物で資料を拝見す

ることにした。なお図書館は来春には新館に移るとのことで、巨大なビルが正門の正面に建築中であった。

建物1階のいったところにカードケースが置いてあって、旧日文図書のカードは書名・著者・分類の3種あり、分類カードだけでも51箱ほどあった。ただここも、偽満時期日文図書だけでなく戦後のものも混排で、カードは、手書きの印刷、印字のものなど様ざまである。分類カードからいくつか資料の出納をお願いしたところ、書庫に入って見てくれということなので書庫2階に入れていただくという幸運に恵まれた。

書庫では、新刊への引越しを間近かにしているのかどうかわからぬが、係員が資料を抜いてまとめているところで、倒した本には触らぬよう、と言われた。ここでは『黒龍江省立図書館図書分類目録』や『吉林省立図書館増加図書館要目』『建国大学研究院調査資料目録』などを見たのだが、資料のなかには、「満鉄奉天図書館」や「師道大学図書館」「哈爾濱商工会庶務科文書受付」「東北図書館蔵書印」など押されてある資料がみられた。もともとこの図書館も、哈爾濱から瀋陽に移った東北図書館の蔵書のうち副本を中心にいくつかの重点大学に分配した、その大学のひとつであったわけだが、したがってこの東北師範大学の蔵書自体はおそらく統一的なものではないとおもわれる。

5時に東北師範大学を失礼して、この日の夜は吉林大学の汪潤茂先生と共に、南湖新民広場近くの「北府餃子王」で餃子をいただく。男性服務員が、恐ろしく長い注ぎ口のやかんからこぼすことなく器用にお茶をついでくれて感動的であった。

11月16日（火）午前 吉林省図書館

本日でこの東三省の図書館調査も最終日となった。午前中は吉林省図書館（長春市新民大街10号）に出かける。3階中央に旧日文図書のカードがおいてあるのだが、あまり利用されていないようで、いささかカードボックスの建て付けも悪く、またケースの収納が少し乱れていた。ケース数をざっと数えて見ると、日文図書目録（書名・建国前入蔵）20、同分類目録19、日文油印資料書名目録3、同分類目録3、旧日日期刊分類目録2、といったところであった。また建国前の新聞もあり、盛京時報や泰東日報、大同報などの紙名もみうけられた。

図書カードはどの時点で作成されたものかわからぬが、記述に「偽満」「偽満洲国」といった表記がみられ、カード記述という意味合いからするといささか問題であるのだが、かの時代に偽満時期旧日文図書を整理し目録作成作業を行う、という現実を照らして考えてみると、なんとも言えない気持ちになってくる。ただカードからリストなど作成することはこれでは適わないのでいずれ現物を見ないといけないうことになる。

さて、この目録から資料を捜して請求記号をメモし、保存文献閲覧室横の小さな部屋にいる係員に出納を依頼した。かれはそれを書庫にいる別の担当に渡し、出納されたらその資料の冊数を管理している。資料自体の管理や複写の受け付けは、保存文献閲覧室の担当司書がやってくれる。資料の中には、朝鮮図書館備付龍山鉄道図書館、その払出証明印、朝鮮総督府鉄道局奉天出張員事務所備付用、満洲中央銀行図書印のものなどもあり、資料目録には、開封鉄路局、太原鉄路局、

張家口鐵路局など鐵路関係のものが目に付いたが、それらには天鉄調査資料の印が押されてあった。資料はたいへんきれいで、よい状態で保存たれていることがわかった。

この図書館では、旧日文図書の閲覧は1冊3元、複写は1枚3元で、複写を依頼すると1階の複写室に連れていってくれた。この複写にはいわゆる外部の業者が入っているようで、そこでコピーをしたのだが、蔵書印など写りが悪くて濃く設定すると真っ黒となり、結局機械が古いということになって、向いの建物の入口にあるコピー屋でコピーをすることになった。ここでもコピーは紙の大きさには厳しく、本のコピー面がB5より大きくても少々はかまわず無理やりB5でコピーしてしまう。従ってどうしても天地が少し切れてしまい、これにはずいぶんまいったし困ってしまった。ちなみにこのコピー屋の料金は、A3で0,7元、B4は0,5元、A4は0,35元、B5は0,25元で、確かに大きさでずいぶん料金が異なることから推測すると、少しでも安く仕上げることを考えてくれたのであろう。ここでわたしは4元4角をはらった。図書館にもどって清算するとき、結局122元を請求されたので、図書館では閲覧料金とコピーの手数料代をはらったことになった。

ちなみにここでトイレを使ったのであるが、この図書館ではドアがなく跨ぐだけの方式で、その方式についてはすでに哈爾濱の兆麟公園で経験済みだったので、わたしとしては、さして驚きもせず困りもしなかった。ただ、哈爾濱のときにわたしは、通路向きではなく壁向きで用を足して、終えてみると向かいのおじ

さんは通路向きで事を行っていた。正式にはそうだったのか、と学習をし終えていたのでこの吉林省図書館のトイレでは通路向きを敢行した。ただ事を終えて見上げると他の人と目が合ってしまう、当然の行為であるとは納得していてもやはりどうしてもバツが悪かった。

古籍組はこの吉林省図書館での作業が午前中で終わらず、結局入口氏を残してわれわれは長春市図書館へ向かった。途中で簡単に昼食をと考えてタクシーを降り、図書館近くの「海鮮広場」の看板がある店に入った。するとそこは1階が「活け魚屋」ともいべき店で、そこで注文してそれを調理してもらうシステムのものであった。各人それぞれ、カワハギ風のさかなと貝と海老とを選んで料理してもらうことにし、2階に案内されそこで主食として広東風チャーハンも頼んだ。テーブルのメニューの中には、お昼のセットメニューのようなものもあって、これにしても良かった、と考えたのであったが、これにしても食事の時に自分が食したいものを注文するということにはまことに難しいものだ、とあらためて実感したことである。そして、世に在る旅行案内書の類は、こうしたことなどになかなか役立たず無力なものだと思いつつ。

吉林省図書館で食事を抜いて目録とり精を出している入口氏には申し訳ない限りであったが、また簡単に済ませて長春図書館へ、と考えていたのであるが、思いがけないご馳走に内心満足しながら図書館へ向かったのである。

11月16日(火)午後 長春市図書館

長春市図書館(同志街50号 郵編130021)では館長と劉慧娟さんが迎えて

くださった。劉さんは、偽滿時期日文図書  
の整理もしてられ、また長春市図書館  
参考部編輯『東北地方文献索引  
(正)・続』(それぞれ1984年、1985年)  
の編輯にも関わってこられた方で、われ  
われも大層心強い司書と知り合うことが  
できた幸運を喜んだ。またここで井村報  
告にもある『長春市図書館蔵東北資料目  
録(旧中日文)』(1958年 223P 油印)  
をも見せていただいたが、原本をコピー  
して事務用に使われたその目録には、び  
っしりと書きこみがなされ訂正が施され  
ていて、それ以降の整理・目録化および  
蔵書の維持に非常な労力がかけられてい  
ることが感じられて大いに感動した次第  
である。こうして満洲の地に遺された資  
料も、非常な手間と努力がはらわれ、そ  
の後も整理して保存されてきたことを思  
うと、まったくもって中国の図書館司書  
たちには感謝の想いでいっぱいになる。

閲覧室でわたしは分類のカードから資  
料をいくつか請求した。カードもよく整  
備されていて、またよく利用されている  
様子でこれもまたうれしかった。資料は  
書庫の入口付近に配架してあるようで、  
出納もスムーズ、書庫を見たわけではな  
いが配架の様が目に浮かぶような気がす  
る。請求した資料も簡易ではあるが表紙  
がかけられ、実に行き届いていて、資料  
が生かされている、と実感した次第であ  
る。

出納された資料からは、満鉄新京図書  
館のものが多いなと感じたが、わたしは  
実は、長いあいだ捜してきた満洲図書館  
協会機関誌『学叢』の第1巻2号と3号  
とにお目にかかれて充分幸せな気分とな  
り、既に目的を達した気分になってしま  
ったのだった。ともあれこの図書館でも、

この『学叢』や『新京特別市立図書館書  
目』などを横目で眺めつつ資料集積機関  
の目録を書き出していったのである。

この長春図書館では、閉室5時ぎりぎ  
りまで見せてもらいコピーを頼んだので  
ずいぶん退出がおそくなってしまった。  
ちなみにここでの旧日文図書の料金につ  
いては、閲覧については1冊1元、コピ  
ーは1枚3元であった。ちなみに、全頁  
複写については6元と倍になるとのこと  
である。わたしは感激して手にした『学  
叢』を、全冊複写お願いします、とい  
うと、全頁なら倍の6元となります、とい  
われ、虚をつかれた感じで、今回は半分  
にして次回来たときに残りの半分をすれ  
ば全頁になると、図書館出身らしから  
ぬことを考えてしまい、今回約半分の複  
写にしたのだが、次回再び来館すること  
などを考えたら倍料金など気にせず頼め  
ばよかったと今になって後悔してしまう  
始末だ。次回来館などというほうがは  
るかに高くつく、おろかなことであつた。

さて、電灯の消えて暗くなった図書館  
を退出してホテルへ向かい、そこで入口  
氏を落ちあって、本日で最後となる訪書  
旅行の打ち上げ晩餐会でなにを食べる  
か、と検討し、やはりきのこ、という結  
論になり、長春の「野生菌菜美食天地」  
へと向かった。そこではすでに学習済み  
となっていたきこの関係をたらふくいた  
だいて、最後にはやはり羊でしめよう、  
とも考えて羊のしゃぶしゃぶも注文し、  
大満足のうちに訪書旅行の予定を終えた  
のであつた。

おわりに

以上の訪書旅行の間に考えたことは、  
これは松原先生も言っておられたことで

はあったが、偽滿時期日文図書に関して、それを所蔵している図書館の協力により連合目録、総合目録を作成する必要がある、ということであった。それも例えば、「満鉄資料」だけという切り方ではなく、また、それが後日総合目録として横断的に利用できるデータベース化でない限り、図書館所蔵分だけ、というように個別のものでもなく、そして資料の優劣や種別を問うことなくすべて等しく、目録化するということである。そしてその場合、目録作業や入力作業の時だけでなく準備段階や下打ち合わせの時から現場の図書館司書が入り、その援助と協力によって推進していくこと、このことは欠かせないことだ、と考えたのである。

今回わたしは、松原先生の先行作業と周到な準備のおかげをもって、省市図書館や大学図書館を有意義に回らせていただき、そこで調査をおこない現物を目の当たりにしてきた。さらにまた図書館で実際に、これら旧日文図書を日々整理・目録化し保存のために努力を重ね、また冊子目録や索引など諸ツールを編成し刊行してこられた図書館司書の方々にもお目にかかることができた。当初、これら「遺された」旧日文図書の処遇はいかなるものであろうか、と内心ずいぶん気になっていたのがあったが、実際に資料を拝見し書庫を見学し司書の方々とお会いして、それらは、文字通り共有の資源として保存されている、ということを確認した次第である。

わたしのこれまで考えてきた文脈の中で語らせていただくと、これら遺された資料群は、いまこうして中国の地で、生かされ残されて保存されている。仮に資料それ自身に貴重なものとそうでないもの

の、素性の良いものとそうでないもの、エリート的資料とそうでないものがあるとしても、こうして等しくスタートラインに立たせることがまず何より大切である。後にその資料が生き延びていくことができるかどうかは、資料自身の力、つまり資料それ自身が持っている生命力や価値により決められるべきことだからなのである。

さらに、各図書館に所蔵されている資料についてその旧蔵や旧蔵書印などの変遷、接收以後の資料の遍歴など来歴を明らかにすること、このこともまた重要である。そしてその作業はやはり、現に中国で資料を蔵している図書館の司書たちこそがふさわしいのではないかと実感したのである。戦前の旧蔵機関などについてはともかく、とりわけ戦後の、国民党政府の東北行營經濟委員会資料室や解放軍による東北財政經濟委員会調査統計書図書館、解放後の東北図書館などで実際に資料をさわり目録を取ってきた、いまだ明かになっていない司書たちを含め、それら資料を継承して整理し保存してきた人々の、日々営々たる「仕事」のことを考えると、そうした気持ちますます強くなっていく。今回の訪書は、そうした人びとに想いをはせる旅行でもあったのである。

(本稿は、文部科学省の科学研究費補助による、平成13年度特定領域研究(A)「東アジア出版文化の研究」の「計画研究」における成果の一部である。)

なお、大連市図書館への紀行記を、「大連市図書館訪問記」と題して『台湾・朝鮮・満洲に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本古典籍の書誌的研究』に掲出したのでこれもご参照いただくと幸いである。

(おかむら・けいじ)



## 訪 書 日 録

某月某日 岡山大学附属図書館

NACSISで検索して、康徳4年満洲国刊行『大清歴朝実録』が岡山大学にあることがわかり出かけた。ただ、漢籍などは遡及入力の後回しになるので近場の大学にも所蔵されていることも充分予測され、とりわけ、当時事業に協力し編集にあたった学者も東方文化学院京都研究所員であったことから当然京大にもあろうと思ったがともあれ岡山の資料をみることにした。

NACSISでは、満洲実録部分だけの所蔵となっていたのだが、幸い、影印すべて、つまり122帙、1220冊すべてが、しかも、保護用のダンボール外函までのこっていて、ラッキーであった。なぜ岡大にと、これが出かけた理由のひとつだったので図書館の受け入れセクションに、この寄贈の年月および寄贈先を原簿で調べてもらった。だがこれは残念ながら、戦後岡山大学が新制で発足するときに準備を整えた岡山大学施設整備委員会からの寄贈となっていて、それは昭和27年8月12日であった。それ以前の入手についてはそれ以上はわからないということであった。これは残念であった。

某月某日 大阪府立中之島図書館

大阪府立図書館の所蔵資料は、中之島と中央と二手にわかれている。資料の切り分けは一応原則ができているのであるが、いざ個々のテーマで具体的にあたってみると、同一関連の資料や同一分野の資料が割れてしまっている、というのが実情である。だがこれはわたしが在職中

であったときのことなので、文句は言えない。

さて今回は、中国の国宝級の刻絲図録『纂組英華』という資料をみた。康徳2年5月満洲国立博物館の開館記念事業として満洲国立博物館で印刷刊行されたものである。図録は56cmもある大型書である。これはもと朱啓の所蔵であり、張学良がその購入を試みたが決済段階で不調に終わり、辺業銀行の倉庫に保管されてきた。それが満洲国建国にともない満洲国立中央銀行の保管となり水野梅暁の羅振玉訪問や羅の満洲国立博物館創設要請、さらに羅の蔵品2000点の博物館への寄贈申し出と事態が進み、水野は宝熙らと協議し満洲国への寄贈の内諾を取りつけたものである。

この刻絲は、昭和17年日滿文化協会の斡旋により帝室博物館において開催された「満洲建国十周年慶祝 満洲国国宝展覧会」にも、典籍(「文溯閣本四庫全書」)、「満洲文蔵経」、陶瓷などとともに展覧された。

この資料の寄贈先を原簿で調べたところ、『大清歴朝実録』とともに「満洲帝国」とあり、当時満洲国から「内地」への資料の寄贈配布先に大阪府立図書館が入っていたことがわかる。ところでここで先に岡山大学にて閲覧した『大清歴朝実録』がわたしにとってもっとも身近な図書館にあることがわかり、どうも機械にたよってしまうわが身を恥じ入る結果となってしまった。

(岡村)



# この一年

堀田 穰

引き続き『子どもの文化』誌の編集委員を務めている。2001年6月号では特集「子どもと労働」を担当した。児童史家の上笙一郎氏、児童文学者の韓丘庸氏、龍谷大学社会学部の持田良和氏と大家ばかりにお願いしたので、原稿の取立てに大いに苦労した。予定より半月も遅れて原稿が出揃った。自画自賛になるが、それでも出来栄はすばらしかった。今日の子どもが直面している状況への処方箋が、少し見えたような気がしたのだ。

10月号では絵本についての特集を富山県大島町絵本館に丸投げした。しかし、やはり丸投げというのは編集意図をうまく理解してもらえない所があり、こちらが長文をつけ加えたりしてかえって手間がかかってしまった。10月号の表紙は本学人間文化学部人間関係学科3回生の今村梓エディテク部長に描いてもらった。12月号は特集でなく書評を一つ掲載してもらおう。在日朝鮮人の児童詩人、李芳世（イ パンセ）のはじめての日本語詩集『子どもになったハンメ』について、彼も私も戦後詩が好きなので、山之口獺などをからめながら論じたものである。

さらに2002年1月号は特集「七年前に大震災があった、そして…」を担当した。ともかく2001年はひどすぎた。池田付属小学校での乱入殺傷事件、明石歩道橋でのパニック事故など、関西で子どもが死ぬ事故や事件がたてつづけに起こり、きわめつけはニューヨークでの同時多発テロにはじまったアフガニスタン空襲、戦

争であった。正月に死臭ふんぶんたる特集をやってもだれも文句を言うまいと、こういう過激な記事になった。この原稿を書いているのが大晦日から元旦なので、まだ反響を聞いていないが、楽しみである。

紙芝居や語りの力の大きさに、改めて感心したのが福島県でのうつくしま未来博、語りと紙芝居のパビリオン「からくり民話茶屋」とのかかわりであった。2001年にはいってすぐ、ともかくだれでも紙芝居が作れる講演をしてくれと頼まれて、郡山へ飛んだ。福島の民話を幾つか手づくり紙芝居にして、夏には七十人ほどが「からくり民話茶屋」で演じた。メインは昔話の小劇場だが、語りは落ち着いて聞くもので、入れ替えの間、列をつくって待たなければならない。博覧会や遊園地は大体そうだが、このイベントまでの待ち時間はかなり問題である。場合によってはイベントそのものの価値さえ揺るがしかねない。ここに民話紙芝居が活躍したのだ。流動している観客の足を止めさせ、興味を抱かせ、イベントに固定させる役割を街頭紙芝居風な上演が、果たしたのである。のべ五千人にもおよぶ県民参加と、観客動員の目標を大幅に超えたことで、「からくり民話茶屋」はジャパンエキスポ大賞を受けた。ユニークな企画の勝利であり、それを実行したユニークな人々に知りあえたのは嬉しかった。

# この一年

下山 志保子

21世紀は「戦争のない世界に」というスローガンで始まったが、アメリカのテロ事件は世界中を巻き込んで「戦争」へと進んだ。日本も軍事に向かう気配が強まり、私は何か不安な心地がした。目の前の学生たちを、再び私が幼い時に体験したような戦火の中に追いやることだけはしたくない。そんなことを思っているうちに、今年も終わってしまった。

さて、私個人の活動は、昨年に引き続き、読み聞かせや子どもたちの問題の講演、「語り」の出番が多かった。1時間のFM放送での韓国の童話の朗読では、韓国の留学生と共演したが、表現の違いなど、民族の主張の違いかとも思われて、なかなかおもしろかった。

児童サービスの勉強をもっとしたいという学生たちの作ったエディターズテクノロジーの活動で亀岡ギャラリーでのイベントへの参加、地元の小学校、子ども会などへ読み聞かせや紙芝居をしに出かけた。夏休み中の宝塚市へのボランティア活動には、市から感謝状をもらったり、子どもたちと手紙の交換をしたりして、楽しかったらしい。私も同行したが、迎えてくれる子どもたちの笑顔と、子どもたちと遊ぶ学生を見ながら、これらのことが、必ず学生たちの将来に役立ってくれると思ったひと時であった。

\* \* \*

「ものを書く」ことでは、今年は書評が多かった。特に数少ない在日韓国・朝鮮人作家の作品や、韓国・朝鮮の児童文学の翻訳もいくつか出版されるようにな

り、アジアの児童文学に少々関わりのある私に依頼が来たものである。今年は書くことに興味を示していた二人の学生にも書いてもらった。児童サービスには児童文学を評価することが必要だからである。下記は書評の1部である。(アジア関係)

・李芳世詩集『こどもになったハンメ』(「アジアの風」アジア児童文学日本センター発行)

・「民族を越えてー在日の詩人」(「zp通信」日本児童文学者協会発行)

・「朝鮮半島の物語を伝えたいー朝鮮半島の民話ー」(図書新聞2558号)

・「中国児童詩への期待」(「虹の図書室」日中児童文学美術交流センター発行 no.15)

・「私の好きな詩」佐々木環(学生)(「虹の図書室」no.15)

・「詩について」西田あや(学生)(「虹の図書室」no.15)

この「虹の図書室」について少し紹介するが、全国版としては、唯一といってよい中国児童文学の翻訳誌である。私の友人の中由美子さん(中国児童文学翻訳者)から、学生たちにも書いてということになった。

\* \* \*

2002年度は、今までしてきたアジアの図書館訪問の続きをする予定で、中国の大連を訪問する。また学生たちへ土産話ができそうである。前回、台湾では倒れてしまったが...

# この一年

久保和雄

今年（2001年）の世相を総括して漢字一字で表せば「戦」ということである。

2001年の最大の事件は、9月11日のアメリカにおける同時多発テロであり、またそれに対するアメリカのアフガニスタン空爆である。

私は、宗教も人類の生み出した文化の一つと考えるが、このテロと対する報復攻撃は、まさに民族と民族の文化と文化の激突である。

日本国内においては、生きる「戦」に敗れた万単位の人びとが自殺に追い込まれた。痛ましい現実である。

自殺は、自己責任と客観的に突き放す人もいるが、私には、他人事には思えない。

私は、集中講義を含めて現在五つの大学へ出講しているが、「図書館サービス論」を担当している大学では、多文化サービスについても必ず触れることにしている。

サラダ・ボール（salad bowl）という言葉を耳にする。

「現代用語の基礎知識」によれば、この言葉を次のように解説している。

「アメリカという多民族国家を表した言葉。かつてはメルティング・ポット（melting pot人種のるつぼ）といわれたが、結局は民族同士が溶け合ってひとつになることはなく、それぞれが独自の文化を負ったまま混然と存在し、サラダ・ボールの中で混ぜ合わされた野菜のようだ」といふところから」

つまりメルティング・ポットからサラダ・ボールへと思考が変化している。

21世紀は、それぞれの民族がそれぞれの文化を主張、発揚する世紀であると考

えられる。

このことは、「民族の世界地図（文春新書）」、「異文化理解（岩波新書）」、「常識の世界地図（文春新書）」等にも書き込まれている。

それぞれの民族が、それぞれ独自の文化を主張することは当然であって決して悪いことではない。しかしこの主張が先鋭化して、他民族の文化を一切許容できない状態になるとこれは非常に危険なことになる。

多文化サービスを契機に私が学生に語りかけていることが二つある。

その1つは、生命の尊厳、つまりどんなことがあっても生き抜かなければならないことを内外の小説、人生論等を引用しながら学生に語りかけることである。

二つには、自国の文化（日本の伝統文化）を蔑ろにしてはならないことを、外国人の日本文化にかんする著作等を引用しながら語りかけるようにしている。

自国の文化に誇りをもつということは、裏返せば他国（他民族）の文化の尊厳を許容することである。

「民族と民族が溶け合ってひとつになることが不可能」であれば私たちは、お互いに他民族の文化を許容しなければ人類の共存が危ぶまれることになる。

アメリカ、カナダ等において「多文化サービス」が必要になってきたのは、多民族国家の当然の帰結であろう。

21世紀を生き抜かなければならない若い人（学生）たちが、日本文化に誇りもち、そして他民族の文化の尊厳を許容できるように巣立って欲しいと念願する一年であった。

# この一年

岡村敬二

本学の司書課程も二年目にはいり、昨年度と同様に、現場の一線で働いておられる外部講師を招いて講義をお願いし、見学会も企画した。

昨年開室した朋文館の司書課程資料室も、資料配架や表示など工夫の余地があるにはあるのだが、ともあれその維持・管理をおこなってきた。これら資料室や図書室は、手を入れて工夫をすればそれだけ結果がついてくる、ということは経験的によくわかっているのだが、なかなか十分に時間を割くことができず、機能を十全に発揮、というところまではいっていない。努力をしていきたいと思っている。

『ニューズレター』や『年報』も刊行できた。『ニューズレター』は当初予定の8ページ立てで年2回、『年報2000』は56ページと、よく原稿も集まり、まずまずの出立であったと自負している。

わたしの方はといえば、今年は、文部科学省の科学研究補助「特定領域研究」(A)「東アジア出版文化の研究」の「計画研究」日本支配化中国・「満洲」における出版文化の諸相が採択され、研究に関してはこれを軸にして動いた。

NACSISなど総合目録や各図書館OPACのネットへの書き出しのおかげで、所在確認が容易となり、効率よく調査ができる有難さを実感した。所蔵館へもいくつか出かけ、図書館の評価は、図書館を見学することによってではなく、その図書館を実際に使って初めて出来る、といった持論を身をもって実践

した。

今年は、念願の中国東北三省への訪書もかない、瀋陽・哈爾濱・長春そして大連と、「遺された蔵書」を保蔵する主要な図書館で調査した。

この1年で発表したものは、「図書館利用の“達人”となるために」(『本学司書課程年報2000』)「わたしの論文、“記事索引”への採録事情」(『本学司書課程ニューズレター 第2号』)「江戸の蔵書家 小山田与清」(『印刷博物誌』所収 トッパン印刷)「日満文化協会にみる「満洲国」の文化活動 - 昭和12年の「転機」から昭和16年「芸文要綱」まで」(『京都学園大学人間文化学部紀要 第7号』)などである。

そのほか、研究発表については、先の科研の研究集会(10月 米沢市)で、「日満文化協会の出版事業」と題して発表し、レジュメに「日満文化協会・満日文化協会刊行物一覧」を付載した。これは『文献探索2001』(金沢文圃閣)に掲載予定である。12月には、出版学会の研究大会で、「満洲出版史のために」と題して発表し、「満洲・満洲国出版史 略年表(稿)」を付載した。これはもう少し調査を加えていざ原稿にしたいと考えている。

\* \* \*

資料室の管理・維持やニューズレターの編集、それに論文を書いたり、これは前職の図書館司書時代の仕事とさして変化はない。ともあれこうして仕事に励めるということありがたいことだと実感したこの1年であった。

## 「紙芝居のある風景」

松原 拓也

現在私の主戦場は紙芝居である。

やれといわれればなんでもやるし、やりたい。この辺りは我ながら随分芸人めいてきたなぁと思うのだが、とりあえず現在はそうなのである。

去年一年というものを振り返ると、春から夏に入るまでの前半が充電期間であったなら、夏から年越しを迎えるまでの後半はその蓄積したエネルギーを使い果たしてなおよまないものであったように記憶する。ひとえにそれは学生生活の中でも一つの転機であったエディターズ・テクノロジーへの入部によるものが大きいのであろうが。夏恒例の宝塚小学校廻りに始まり、秋の「亀岡フェスタ2001」への参加、十二月の二度のクリスマス会への出演など、それは長くいつまでも終わらぬ夏のようにもあった。

そもそも半年前までは素人同然であり子供もさして好きではなかった私が、この長い一夏の間に、その十枚程の紙の上に全幅の信頼を寄せ、子供たちの前で左から右へ嬉々として引くようになったのだから、人生というものは中々に面白い。

現在の私はれっきとしたエディターズ・テクノロジーのメンバーであり、読み聞かせ活動に当の子供以上に夢中な紙芝居マニアなのである。

紙芝居というものは大きく分類すると平絵式と立絵式の二つに分かれる。

平絵式とは人物から背景までが一枚の画面に描かれた紙に物語を場面ごとに振り分け、左から右へと一枚一枚抜きながらやる従来の紙芝居のことであり、立絵

式とはペープサートのように登場人物や物語のキーとなる事物などの独立した切り抜きを人形的形式に使うものである。(他に紙芝居の源流となる絵巻物に通じる巻物型の紙芝居というものもある)

実際のところ、私が入部当初やり始めたのは後者の立絵式紙芝居の流れを汲むパネルシアターであった。

デビューとなった宝塚小学校廻りでは、やや異色ではあるが、題材として五味太郎氏の『かくしたのだあれ』を専用の紙の上におこし、一問に対し子供達数人を当てて答えさせるというやり方をとった。

これには子供達はキャアキャア言って喜んでくれ、我先に答えようと大声を出しながら手を挙げ、前に乗り出してくるもので、子供達より遥かに「お話し会初心者」である私は文字通りきりきり舞にさせられた。その様子はさながら早朝の魚市場を想起させ、こちらが「一人づつね」となれば止まる時はあるものの(当然止まらないところもある)、その後は早く当ててくれと激しく目で訴えかける子供達と正に一触即発状態の緊張感あるゲームが続くという、初体験からそれはハードなものであった。

しかし、今にして思えばこのときの子供達との対話に重きを置いた出し物の選択が、より私を読み聞かせへのめりこ



宝塚の小学校にて



ませる要因となったような気がする。それは非常に厳しくある反面、子供達と正面を向き合ったぶつかり合いのコミュニケーションが非常に楽しくあるものであり、時には演じる者と観る者との間の溝すら打ち消えてしまうものだった。

そして、さらに私の中で読み聞かせに対する位置付けを決定させる出会いがあった。紙芝居『黄金バット』との出会いである。

皆さんは御存知であろうか。街頭紙芝居興隆期であった昭和5年にヒットした、鈴木一郎作・永松武雄画による勧善懲悪の永遠のヒーロー物。

作られた翌年には早くも各地にニセ黄金バットが続出するほどその人気は高く、作者が変わりながらもシリーズ化し、現在も加太こうじ氏作・画による紙芝居が復刻版として大空社から出版されている。

秋の「亀岡フェスタ」を迎えるにあたって、出し物を悩んでいた私の目の前に突如現れたこの異色のヒーローは、当時の子供たちと分け隔てすることなく現代っ子である私の心を驚ぶかみにし、たちまちのうちに紙芝居の世界へと夢中にさせたのだった。

私がハマる紙芝居の魅力。ひとえにそれは演出の魅力といっても相違ないだろう。

よく紙芝居が「読む」と表現されているのを耳にするが、私は紙芝居とは「読む」ものではなく、「話す」ものであると認識する。

確かに紙芝居の後ろに書かれている文字を一字一句違えることなく読もうとすることも大切ではある。しかし、その紙芝居の筋や元からの演出法を考慮した上で、独自の演出をつけるということで紙

芝居をやる楽しさは数倍に跳ね上がる。

一つの劇を演じるように、紙芝居をやることでの、生の緊張感と演じることの爽快感、それに伴う観衆の反応は何物にも変えがたい魅力をもつ。

これは私のあまり多いとはいえない体験からではあるが、紙芝居というものはとかくどの出し物よりもウケがよい。

物語的な要素なら紙芝居以上に秀作がそろっている絵本や、目新しいパネルシアター、ペープサートよりも、紙芝居を聞く子供達の瞳は真剣だ。

ひとえにこれは子供達も紙芝居の魅力を知っているからだろう。紙芝居は少しの演出を加えるだけで話のほうもまた一味違う面を出し、自分が知っている話でもまるで違うもののように聞こえてくる。子供達が知っている話でも、わずかな演出で、「お、ちょっと違うぞ」と子供達に思わせ、聞こうという姿勢を作ることができる。

街頭紙芝居のヒットは次々とする続きもの見たさ、という要因も大きいのだろうが、空き地などの空間に共通の目的を持つ連帯感ある小集団を築きあげたことにこそあるものだろう。

街頭紙芝居における小集団の親しさと楽しさ。飽こそ売らないまでも、それを小学校や図書館の中でも再現し、自分自身も一体となり楽しみたい。そんな想いこそが私を読み聞かせへと誘う一番の理由なのかもしれない。

最後に私の読み聞かせの師匠である京都学園大学助教授堀田穰先生と、「亀岡フェスタ」にゲストとしても来て頂いた紙芝居師のとは鈴木氏。私が技を盗ませてもらったご両人にこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。

(まつばら・たくや 人間文化学部3回生)



## 執筆者紹介・後記

杉田正幸氏。視覚障害のハンディを持ちながら大阪府立中央図書館司書として司書部閲覧第三課対面朗読室に勤務。氏には昨年7月、本学に「外部講師」として来学いただき、「視覚障害者の情報環境について」と題して講義していただいた。杉田氏のお仕事ぶりは、一昨年だったか、NHKテレビ「きらっと生きる」で紹介されたのでご覧になった方もおられるかもしれない。なお、氏はホームページをお持ちで(<http://www.web.ffn.ne.jp/sugita/>)また大阪府立図書館「障害者サービスのページ」のアドレスは<http://www.library.pref.osaka.jp/central/taimen.htm>である。

荒井洋二氏。1950年生まれ。現在大阪府立中央図書館の社会科学・自然科学資料室主査。氏には昨年の『司書課程年報』にも寄稿していただき、レファレンスという日々の仕事の機微に触れていただいた。わたしたちは氏と研究会を持っているのだが、そのなかで氏は、例えば、資料調査の腕をあげたりレファレンスワークのわざを磨いたりするためには、『統計資料要覧』や『人物レファレンス事典』などいわゆる数多くの「事典の事典」類を覚えていくという「王道」のほかに、すぐれもの参考図書を丸ごと読んだり、調査の方法と回答をあらかじめ示したうえでそれを追体験させることで習熟度を高めまた応用技術を獲得できる、とくわしが勝手に読み込んでいるのだが)いったことを報告され、感銘をうけて今回また無理をいって執筆をお願いした。当方の勝手な注文にご苦心され申し訳無かった。

古川千佳氏は現在、京都大学附属図書館情報管理課目録掛非常勤職員として古典籍を中心に資料整理の仕事をしておられる。これまでに、谷村秋邨文庫、黒田鞠庵資料、室賀信夫コレクション、坪井芳洲・為春旧蔵書、河野鉄兜旧蔵書などを整理し、目録編纂・刊行にも関わってこられた方である。豊かな資料を所蔵する京都大学附属図書館の書庫資料のなかから刊記を点検され、「出版」を示す言葉を抽出されたわけだが、今後、各方面で何かと利用していただける研究であると、編集者としては自負しているところである。

久保和雄氏、下山志保子氏はともに、本学司書課程の非常勤講師である。昨年に引き続きして執筆していただいた。

岡村敬二と堀田穰は本学人間文化学部の教員である。岡村の訪書記は、10月の瀋陽・哈爾濱・長春のものだが、12月には大連市図書館にも出かけ、その紀行記を、「大連市図書館訪問記」として『台湾・朝鮮・満洲に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本古典籍の書誌的研究』に掲載した。あわせてご覧いただければ幸いである。堀田穰はこの2月18日から3月3日まで、NGO「ラオスの子どもに絵本を送る会」で紙芝居による国際教育援助にでかけた。来年のラオス報告記に期待しよう。

松原拓也は、人間文化学部文化コミュニケーション学科の3回生で、読み聞かせなど児童サービスの研究会であるエディターズ・テクノロジーの部員である。

後記；予定どおり『司書課程年報2001』をお届けする。今号は現場からの報告とあわせて訪書記や書誌的論考など資料論の色合いあるものも掲出できた。よいバランスとなったと考えている。よろしくご批評お願いいたします。(岡村)

---

### 京大学園大学 司書課程年報2001

平成14年3月30日発行

編集・発行 京大学園大学司書課程

〒621-8555

京都府亀岡市曽我部町南条大谷1番

TEL0771-29-2462/FAX0771-29-2239

編集責任 岡村敬二

印刷 和光印刷株式会社

用紙 表紙：サンマット111 本文：クリーム書籍40

---

＝読む人・売る人・つくる人＝②今井よね



---

街頭での手描きの紙芝居でなく、印刷（教育）紙芝居をはじめて創ったのは、キリスト教を普及させるためであった。写真はその最初期、一九三三年のもので今井よね（一八九七～一九六八）が制作した。最初めり絵式だったそうだが、この「Xマス物語」はきれいなカラー印刷である。画家はどうやら街頭紙芝居の画家を起用したのではないかと思わせる画風である。今井について詳しいのは故上地ちづ子氏だったが、その「今井よねと福音紙芝居」（一九八八）を見ると不思議なことに、この作品を確認していない。

『子どもの文化』誌の編集長も務めた上地氏なのに、なぜ、見ていないのか？と云うのも、これは子どもの文化研究所ビルの屋上にあるプレハブ倉庫に所蔵されていたものなのである。

---